
機動戦士ガンダム U.C.0503

F20C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム U・C. 0503

【Nコード】

N3334Q

【作者名】

F20C

【あらすじ】

宇宙世紀0503年。連邦軍に代わって、PMC（民間軍事会社）という武装組織が、活躍し始めていた頃。一人の青年パイロットがいた。

マイペースな同居人であるフィーナに振り回されたり、モビルスーツで戦争したりと、落差の激しい生活をしていた彼、レムス・ヴィーランド。

彼は混迷する世界と、自身に訪れた変革をどう捉え、どう向き合っていくのか。

これは、そんな一人のモビルスーツ乗りの戦いと変化の物語。

プロローグ U.C. 0503 (前書き)

どうも、F20Cと申します。

この度は、以前から考えていたガンダムのオリジナル小説を形にしてみました。

オリジナル作品ですので、ガンダムという作品を大事にしたい方、二次創作に不快感をお持ちの方はご注意ください。

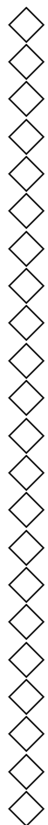
不定期更新ということになりますが、出来るだけ更新頻度は早いものにするつもりですので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

プログ U.C. 0503

Die Welt ist alles, was der Fall ist.

世界とは、起きている事全てのことである。

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン 『論理哲学論考』より



星が目まぐるしく視界の中を踊る。星といっても、それは星本体ではなく恒星の放った光だ。それも、いったい何百年・何千年・何億年前の光なのかも分からない、太古の昔の光。

光のスピードでも億単位の年数が掛かる距離から届いた光、それは波であり、粒子でもある。

何が言いたいのかと言えば、宇宙空間というものは中々に綺麗なものだということだ。

まあ、地球圏から離れすぎるとどうなるか分かったものではないが。

そんな中で……………

「う、うわああああ!!!?」

緑色の何か、見たところ人型の機械のようなものがピンク掛かった光の閃光に貫かれた。

こちらの光は、ただ明るいだけでもなければ恒星の放った光でもない。大量のエネルギーを圧縮し、人を殺すための武器として放った結果生まれたものだ。

その光に貫かれた緑色の機械の人形のようなものは、その形状を留めること叶わず、爆発する。

がしかし、音というものは、空気という媒体の存在なくしては人の耳には届かない。音とは振動であり、波だ。

それが人の耳に入り込み、音という情報として処理されるには音を届けるための媒質が無くてはならない。

故に、今現在、目の前で起こっている爆発の音など誰の耳にも入らない。

そう、そこは宇宙空間であり、同時に真空なのだから。本当に『何も無い』ところでは音など発生しない。

「……………だから大人しく投降しろと言ったのに……………バカな奴だ……………」

その爆発、爆発と言っても宇宙空間には酸素もないので爆発による炎も発生しないため、地上に比べれば幾分か地味なものではあるのだが、兎に角、金属で出来た何かが吹き飛んでいく様子を、男は冷

めた目で眺めていた。

爆発したのは、MSモビルスーツと呼ばれている有人機動兵器だ。

男の記憶が確かならば、確か先月ロールアウトしたばかりの新型、『トロイア』だ。

「こんな冷たいところに放り出されて死ぬよりか、暖かい地上で死刑になった方が楽だったのかもしれないのにな……」

そして、冷たい視線を爆散したトロイアに向けながら呟く男もまた、モビルスーツに乗っていた。

彼の今日の仕事は脱獄犯の処分。大した罪ではなかったのだが、MSを奪取した挙句に脱走したのが悪かった。

この世の中、軍人やPM民間軍事会社Cなどのライセンスを持つ人間以外がMSに乗る事は固く禁じられていたからだ。

今しがた、冷たい宇宙で挽肉になったであろう脱獄犯もそれくらいの知識はあったのだろうが、逃げたいという意思がそれを曇らせたというのが一番しっくりくる。

まあどちらにしても、脱獄犯が死ぬことは決まっていた事なので、いまさら何を言っても仕方ないことなのだが。

『レムス・ヴィーランド、お疲れ様。目標：破壊はこちら……でも確認したわ、帰投……て頂戴』

「了解した。それとミレーヌ、軍の尻拭いはこれつきりにしてくれ。いくらお前の頼みでも、PMCの連中にはあまりいい顔をされないんだ」

コンソールに入った通信に応えるレムス。この男こそが、さきほどトロイアを撃破したMSのパイロットである。

彼は通信の相手、地球連邦軍士官であり、旧友でもあるミレーヌ・アルフィードに愚痴っぽく返す。

脱獄犯が苦し紛れに散布したミノフスキー粒子の所為か、若干音声
が聞き取りづらいが、それも段々とマシになっていく。

『釣れないわねえ、ちゃんと報酬だって払うのにいゝ。』

「そういう事じゃないってことは言わなくても分かるはずだろ？
言っちゃ悪いが、今の世の中、連邦軍の力なんて無いにも等しい
んだ。PMCの方が良い仕事してくれるって、某掲示板にも載って
るぜ？」

『うわぁ……随分ハッキリ言うのねえ……。ま、事実だし仕方ない
けどね。』

レムスの皮肉全開のセリフにも、怒った様子もなく、逆に自分の職
場をバカにされたにも拘らず、それを肯定するミレーヌ。
昔から、レムスはこの女のこういったところが苦手だった。

『仕方ないわねえ……そんなじゃ、今日は夕食奢ってあげるから、そ
れで機嫌直して頂戴』

「別に怒ってるわけじゃないから、いいよそんなもん。それに、寄
り道して帰ったら面倒な女に拗ねられちまうからな」

『あぁ、フィーナのことかぁ……。あんた達、もしかしてまだ一
緒に住んでるの？』

「住んでるんじゃない、住まれてるんだ」

レムスは言いながら、コクピットのフットペダルとレバーを操作し、機体を岐路に向かわせる。

ザルヴァートロドライブ（通称Sドライブ）と呼ばれる、少々特殊な動力炉から捻り出される出力がバーニアに回され、機体は宇宙空間を移動し始める。

『なんだかんだ言って、あんたってああいうタイプの女の子に弱いからねえ。ま、結婚式には呼んでよね、私スピーチには自信あるから』

「アホか。仮に結婚することになったとしても、お前にだけはスピーチはさせん」

レムスは淡々と答えながら、ミレーヌの口撃を躲していく。これにいつまでも付き合っていたら、本格的に帰るのが遅くなってしまいそうである。

『ありゃりゃ、振られちゃった……。あ、帰投したら機体の整備はこっちですから、四番ドッグにまで機体を回しておいて頂戴ね。整備が済み次第、軌道エレベーターで地上に降ろしちゃうから』

「良いさ、ドライブにエネルギー補給してくれるだけで。一発も食らっていないからな」

『ありゃま、これまた失礼。それじゃ、補給の手配はしておくわ。今日はありがとね、レムス♪』

そう言って、ミレーヌとの通信は終わった。

やっこのことで静かな時間を取り戻せたレムスは、一つため息をつきMSのカメラアイから流れてくる映像を見ながらなんとなく呟く。

「退屈だ……。なあ、お前もそう思うだろ？ 『フリスベルグ』？」

自分の相棒、青と白をメインにしたカラーリングと、翼を模した背中
中の機構が特徴的なMS『フリスベルグ』に、来るはずもない答え
を期待せずにそう言ってみるレムス。

何百年も前にあったらしい戦争で、『白い悪魔』だとか言われてい
たらしいガンダムと同じ、ガンダムタイプのMS。

この機体を相棒にして早二年だが、やはり愛着は勝手に湧いてきて
しまう。こんな風に話しかけてしまうのもある意味では仕方ないこ
となのかもしれない。

「地球……。かあ……。今日も気持ち悪いくらい青いな……。こ
れで環境破壊が進んでるってんだから、驚きだよ」

レムスは操縦に意識をシフトさせ、目の前にある人間たちの故郷で
ある惑星、地球を見てそう呟く。

軌道エレベーターが、地上から伸びている様は、さながらバベルの
塔を空から見下ろしているような気にもなってしまう

「アホくさ……。なに感傷的になってんだか………」

小さく呟く彼の視界に、連邦軍の艦艇が入ってきた。どうやら、あ
れに乗ってから補給を受ければいいらしい。

レムスは、艦艇に近づき、オートパイロットに操縦を切り替えて、

着艦の衝撃に備えるのだった。

この青い星で、命が溢れているこの星で、今日も人は自分を意識して、自身の存在を疑うことなく意識し、一つの現象として生きている。

世界は、現実現象として起こっている事で構成されている。それらの現象はどこかで繋がって、世界を束ねている。

人という存在、その現象が起こっているということもまた、世界を作り出している一つの結び目だ。

レムスは、地球をフリスベルグのコクピットから眺めながら、取り留めの無いようなことに思いを馳せ、自身を意識していた。その意識も思考も、不連続なモノだと分かっているながら。

このとき、地球は宇宙世紀・U・C・0503を迎えていた。

プロローグ U.C. 0503 (後書き)

レムス「……………はじまったな」

F20C「だねえ」

レムス「……………」

F20C「……………」

レムス「なんか喋れよ。」

F20C「え、いや……………こうも空気が冷たいとは……………」

レムス「はぁ……………情けない作者だ……………」

F20C「あれ？ おかしいぞ？ 作者がキャラに溜め息吐かれるなんて……………」

レムス「作者は就活中と言うことなので、高頻度の更新は出来ませんが、よろしければ付き合ってやってくれ。以後、よろしく頼む」

F20C「普通に話せるんじゃない……………」

A c t. 1 襲撃（前書き）

と言うわけで、A c t. 1でございます。

今回はヒロインの登場になりますね。主人公のC Vは子安武人さん（ガンダムS E E Dのムウさん）、ヒロインのC Vは水樹奈々様（リリカルなのはシリーズのフェイトさん役）で脳内再生してみてください。

Act. 1 襲撃

「ふう……二日ぶりの地上か……。なんだか地球の重力は気持ちが悪いな……。やっぱり」

レムスは軌道エレベーターで、愛機であるフリスベルグと共に地球に降りた。軌道エレベーターで宇宙から地上まで約二時間。

大昔では、軌道エレベーターは技術的な問題もあり、空想、または概念的なものとされてきた。故に、やっとの事で完成したのはいいが、宇宙に上がるまで5日も掛かっていたらしい。

技術の進歩というのは、凄まじいものである。

レムスは重力の存在を確認すると、小さく深呼吸をした後歩き出す。フリスベルグはモビルスーツ輸送用トラックに積んであるので、レムスが所属しているPMCまではそれに乗って帰る予定だ。

「にしても……こっちはこっちで相変わらずか……」

軌道エレベーターの出入り口付近は整備も進んでおり、清潔さを保っているのだが、少しでも道を外れてみれば、貧民層の人間がホームグラウンドとして生活している、エリア999が嫌でも目に入ってくる。

エリアというのは、行政府が定めた地区の区別の仕方、まあ町の呼称の仕方だと思えばいいだろう。

そのエリアの中でも、エリア999は特に治安が悪く、同時に経済

的に貧しい層が集まる見た目的にも、実際入った感想から言っても暗い地域なのだ。

他のエリアはそれなりに治安もよく、経済も活発なところも多いが、まるでそのしわよせを受けているかのように、エリア999は荒廃している。

「お…。メールが来てるな……………」

と、エリアの話はそこそこに、レムスは新着メールの存在を確認した。
が、彼の手には携帯電話の類はない。

「ええと……………なんだ、ジグからか……………大方、早く帰ってこいとかか？」

レムスは新着メールのボックスを開き、その中にあるメールを開示する。差出人は、PMCの仲間でもあるジグだった。内容も、レムスが予想したとおりで、仕事を立て込んでるので早く帰ってこいというものだった。

さてさて、ここでバイオチップについて説明しておこう。

バイオチップとは、ナノサイズの超小型コンピュータである。そして、そのバイオチップを人の脳に定着させ、電脳化させるという技術が存在しているのだ。

電脳化というのは、トランスヒューマニズム（超人主義）と情報化社会に対しての、新たなアプローチとして、各研究機関が始めた技術であり、完成までに少なく見積もっても100年ほど掛かったらしい。

電脳化された人間は、携帯やPCなどと言った情報端末なしでも、常時ネットに接続している状態であり、電話もメールも端末なしで利用することが出来る。

脳の視覚野に直接メールなどのコンソールが出てくるので、感覚的には目の前に現れた画面を操作する感じである。

「ええと……他には……。これは、コールからのメールか………。あいつも相変わらず元気にやってんだな………」

なので、傍目から見れば、電脳化した人間がメールやネットでの検索結果などを読んでいると、中をぼんやり見つめながらも、目だけが忙しく動いているようにしか見えない。

加えて、電脳化のメリットはもう一つある。それはモバイルスーツのと相性の良さだ。

元来、モバイルスーツの調整や初期設定、戦闘直前のシステムのチェックなどは備え付けのコンソールを使用してするしかなかった。

しかし、電脳化したパイロットならば機体とクロッシング、同調してより素早く、適切な処理が可能となり、モバイルスーツのマシンレスポンスも段違いに良くなる。

連合軍もPMCのMSのパイロットは、今やその約4割が電脳パイロットである。

電脳パイロットは、得てして戦力してかなり優遇される。能力的にも、挙げるであろう戦果を見積もっても、一般パイロットと比べればその差は歴然なのだ。

情報化社会が進むにつれ、人間は様々な知恵を絞って端末などを開発してきたのだが、電脳化というのは、ある意味ではその究極の形

だろう。情報社会、延いてはネットに適応した人間。それが、電腦化という技術によって生み出されたのだ。

が、電腦化の技術は良いことだらけではない。もっとも代表的な問題は、バイオチップと脳との相性なのだ。

脳との相性が悪ければ、チップは起動すらしない、下手をすればチップが原因で体調を崩す人間もいるのだ。それ故に、電腦化は未だに公にはあまりいい顔をされない。

民衆の約半数が、電腦化している人間に対して、『チップパー（バイオチップ狂い）』だとか『機械人間』だとか、様々な蔑称を以て呼称している。まあ、この傾向は昨今有名になりつつある、とある宗教団体の影響が大きいのだが、それは追々話すでしょう。

「さてと……そろそろトラックの準備も出来ただろうし、受け取りに行くか……」

レムスは視覚野に現れていた画面をキャンセルし、フリスベルグとそれを運ぶ輸送トラックを受け取るために、貨物受取所まで向かうことにする。

が、その時……

「ん？」

レムスの感覚の中に、よく知っている感覚が流れ込んできた。たまにこういった体験をするのだが、その時には限ってとある女が関わっているのだ。

「フィーナか……」

「なあんだ……分かったのか……折角、後ろから抱きついてあげようと思ったのに……」

「やめてくれ……」

レムスと同じ、銀色の髪を背中あたりまで伸ばした美女。いや、美女など彼女からすれば言われ飽きたフリーズなのかもしれないが、兎に角美しい女がレムスの背後立っていた。

どこか冷たい感じを与える美貌を持っているフィーナであるが、プロポーションもバランスが取れており、神様からの贈り物としか言えない容姿をしている。

大きめのセーター（恐らくレムスの私物）＋レギンスという野暮ったい格好にも関わらず、彼女の美しさには一辺の陰りもない。

「なんでお前が此処にいるんだ……。ラボで留守番してるんじゃないのか？」

「なんとなく……。何となく、あなたが帰ってくるような気がしたから、フラッとね」

「なるほど。フラッと、ラボから数百キロ離れた、この軌道エレベーターまで来たって事か？」

「そうよ？ どこかおかしい？」

普段からこんな感じなのだ、この女は。一般的な感覚とどこかズレているというか、兎に角ゴイングマイウェイ女なのだ、このフィーナは。

「…………百歩譲って、迎えに来てくれたのなら礼は言おう。でもな、そんな何となくの感覚で、このエリアには近づくんじゃない。ここは犯罪の坩堝みたいところなんだからな」

「大丈夫よ、あなたが来るって分かってたんだから。」

「はぁ…………ニュータイプかお前は……………」

人類の革新と呼ばれた存在、『ニュータイプ』。その存在は、大昔から時折話題になってきたものだ。

超能力者のような扱いをされたり、モビルスーツを扱うのが非常に上手い存在として扱われたり、時代に、政治の状態によって様々な捉えられ方があった。

まあ、実際にそう言った人種が居ることだけは事実のようなので、レムスも否定するつもりなどはないが。

「レムスだって、私が声をかける前に私の事見つけてくれたじゃないかい」

「アレは……………」

「ふふふ…………私たち、揃ってニュータイプなのかもしれないわよ？」

そんなことを言いながら、綺麗な銀髪を踊らせながらフィーナがレムスの腕をとってきた。

俗に言う、腕組みという体制というのだろうか、この状況の場合は。

「何故、腕を組む？」

「決まってるじゃない。私があなたのパートナーだからよ」

「はぁ……………もう好きにしろ」

これ以上フィーナに付き合っていると日が暮れてしまう。こうなれば、この女の好きなようにさせて、やるべき事をやった方が合理的だと判断したレムスは、フィーナを伴い貨物受け取りの場所まで歩き出す。

二の腕に当たる柔らかい感触には気がつかないふりをしながら。

「ねえ、今回はどんなお仕事だったの？」

「別に。ただのゴミ掃除だ」

「ふうん……………」

何かを探るような瞳でこちらを見つめてくるフィーナ。別に嘘は言っていないので、レムスは構うことなく歩き続ける。

軌道エレベーターの付近と言うことで、この町はかなり発展している。がしかし、先程説明したように、エリア999のようなゴミの吹きだまりのような部分も存在している事も確かだ。

それ故に、エレベーター付近は犯罪発生件数が他の町に比べて頭一つ抜けている。

犯罪の重さや種類にも大小様々、やること色々といったように多種多様なところも特徴だろう。殺人があれば、スリもあるし、路上での喧嘩など日常茶飯事だ。

今日に限っては、どういうわけか街は静かなものだが。

さて、話を戻そう。地球連邦という名の政府は、昔こそジオンと名のつくもの達と戦争をしたりと、それなりの力を持っていたようだが、今は小さな政府路線を走っており、影響力はほとんど無いに等しい。

小さな政府と化したことで、確かに地球に住む人たちの課税は低い水準となっているが、その分税収が低下してしまうので、どうしても社会保障などが削られてしまう。貧しい人たちへの援助も満足に行うことが出来ないのだ。

その結果こそが、あのエリア999なのだろう。

政府の力が弱まったと共に、軍事への予算なども減少し、連邦軍の力など当ても出来ないほどのものに成り下がってしまった。故に、連邦加盟国内での紛争や、独立問題などが最近が多い。

モビルスーツの開発は何とか続いているようだが、その性能は全盛期を超えることはないだろう。

「レムス………なんだか怖い顔してるわね……」

「そうか？」

「ええ。なんだか、此处が、地球が嫌いみたいな、そんな顔してるわよ？」

フィーナはレムスの表情を観察していたようだ。歩きながらそんなことしていれば、躓きそうなものだが、この女の器用さにはホトホト呆れてしまう。

「地球がって言うより……その中での生活感が気になるだけだ……どこか落ち着かない」

「私もあなたもコロニー生まれだからでしょ？ 私だって、地球の重力は苦手だし、あなたの言う生活感に苦手意識を持つのは分かるわ。」

「まあ、毛嫌いしてる訳じゃないけどな。ただ、やっぱり俺は宇宙そらに居た方が落ち着くんだよ……」

二人はそう言いながら歩みを止めることはない。
先程から2、3回、スリの手が二人の財布を狙ってきているが、それも華麗にスルーしている。まあ、スリからしてみれば、狙う相手を間違えているとしか言えない。

こんな軽犯罪でも、発生した犯罪の中では2割を占めている。一番大きな割合を占めているのは傷害事件などだ。
今の政府には、警察機関にはそれら全てに対応する力はない。

そこで力をつけてきているのが、PMCである。
民間軍事会社

政府からの認可を受けた私設の武装集団。まあ、本人達からすれば立派なビジネスなので、企業として、仕事して、お金のためにモビルスーツを使った戦闘で、紛争の仲裁に入ったりもする。

加えて、本日のレムスのように連邦軍の尻ぬぐいの仕事も回ってきたりするのだ。何でも屋のような見方もあるが、殆どがそこまで安い組織ではない。

何でもかんでも民営化すればいいわけではないのだが、少なくともPMCの制度に関しては連邦の考えた案としては中々に有意義な政

策だったといえる。

連邦国民も、PMCの働きを大いに評価している。

とまあ、時代背景などの細かいことは追々話していくとしよう。

レムスとフィーナは、一緒に歩くこと約10分掛けて、貨物受け取りの施設まで辿り着くことが出来た。

「『フリスベルグ』はトレーラーに？」

「ああ、そろそろここに来て……………。ああ、アレだな」

二人の視線の先に、周囲のものよりも一回り大きなトレーラーが、自動運転でこちらにやってくる。

トレーラーの荷台には、レムスの愛機『フリスベルグ』がしっかりと固定された上で、外から見えないようにシートで覆い被さられている。

まあ、このあたりではモビルスーツの移送などは年がら年中、ほぼ毎日あることなので周囲の人たちも、特に珍しがったりはしない。

「よし、さっさと乗って、さっさと帰るぞ」

「つまんないわねえ……。そこで私をデートに誘うとか……………」

「ねーよ」

「あら、つれない」

二人は漫才コンビのような（かなりクールな漫才だが）やりとりを

しながらも、フリスベルグの確認や、バイオチップネットワーク経由での書類の審査などを進めてさっさと帰ることが出来るように、きびきび動く。

フィーナもまた、電脳化された人間なので、この手の作業はお手の物だ。

ドオオオオオオン！！！！

と、その時だった。二人の耳に、強烈な爆発音が届いたのは。

「なんだ？ テロかなんかか？」

「今の爆発音は……爆弾の類じゃないわね。どちらかと言えば……そう、モビルスーツのビームライフルの……」

レムスとフィーナが、爆発音に焦ることもなく、淡々と状況の整理をしていると、あるものが視界に飛び込んできた。

どうやら、フィーナの見立ては当たっていたようである。

「『グラズヘイム』の連中か……？」

「モビルスーツでの布教活動なんて……随分斬新な試みね」

レムス達の視界に入ってきたのは、白いカラーリングのモビルスーツだった。どこかのつぺりとした気持ちの悪いデザインが、特徴的である。

武装はビームライフルと、背中に見えるビームサーベルのみというシンプルなモビルスーツ。その名も【イーム】、最近世間を騒がせ

ている、新興宗教団体のシンボルとしての役目を帯びた機体である。混迷する地球に喜びをもたらすと宣言した神父が長を務める宗教団体、『グラズヘイム』。

そのシンボル役のモビルスーツが、武装した上で軌道エレベーターで栄える町『グラム』を襲撃してきたのであった。

Act. 1 襲撃（後書き）

フィーナ「と言うわけで、レムスの妻、フィーナ・ラーズハートよ」

レムス「待て。いつ妻になった」

フィーナ「愚問ね。ついさっきよ」

レムス「いや、明らかにおかしいだろう。そもそも、お前は……」

F20C「なにナチュラルにイチャついてんですか？ 全く、これだから最近の若いモンは……」

レムス「その最近の若いモンであるお前には言われたくないな。ガンダムユニコーンのDVDを1, 2巻をまとめて買うという子供らしき全開の買い物をした奴にだけは……」

F20C「う、うるさいやい!!! ガンダムは別腹なの!!!」

レムス&フィーナ「甘いものを目の前にした女子か」

この小説のOP・EDを募集いたします。なにかアイデアがございましたら、何卒よろしくお願いいたします。

次回 Act. 2 『スレイプニール』

Act. 2 スレイプニール（前書き）

さて、第二話でございます。

主人公の初戦闘ということで、若干の不安を覚えつつも……

あ、フリスベルグのイメージですが、そうですね……一番近いイメージでは、H i - v ガンダムが近いですね。

詳しい機体データはまたいずれということでW

でわでわ、Act. 2をお楽しみ下さい！

Act. 2 スレイプニール

『我々は、地球に住む人々を、電腦化という自然の摂理に逆らった所業から守らんと立ち上がった、グラスヘイムの戦士である……!!』

『ここ、軌道エレベーターで栄えるグラムにおいて、本日大量のバイオチップに搬入があると聞きつけ、我々は人々をバイオチップの驚異から保護すべく、それらを回収・破壊するためにやって来た。』

『自治政府に通告する、30分以内に町にある全てのバイオチップを我らに引き渡すようにされたし。この通告が受け入れられない場合、我らは軌道エレベーター・物資搬入口を武力を持って破壊することも辞さない構えである』

白く、ノッペリとしたデザインのモビルスーツ、『イーム』。マイクを通して、自称グラスヘイムの戦士達は一方的な通告を『グラム』自治政府に叩き付けてきた。

長々とした内容だが、要するに『バイオチップ寄越せ、さもなければ施設を破壊する』ということである。

「おいおい……いつからあいつらは、宗教団体からテロリストにジヨブチェンジしたんだ?」

「元々掲げてた教団理念とも、乖離がすごいわね……。案外、内部分裂でもしたんじゃないの?」

「ま、元々電腦化には一般人の三倍は拒否反応を示す奴らの集まりだからな。どこで火が付いてもおかしくはないさ。いつの時代も、宗教には争いごとが付き纏ってる、別に珍しい事でもないか」

そして、今まさにテロと捉えられてもおかしくない状況、周りの民衆達は逃げ惑っている中、レムスとフィーナは淡々と出発の準備をしていた。

まるで、グラズヘイムの連中など眼中にないような感じさえ伺える。

宗教団体・グラズヘイム。

ここ数年でかなりの力をつけつつある新興宗教団体であり、主に電脳化技術廃止に力を注いでいる組織でもある。

人間は、自然に生まれたままの形であるべきで、云々、教義などは確かそんな感じの小難しい言葉が並んでいた気がする。

貧困層にかなりの信者を抱えているらしく、構成人数の規模は数千人にも上るとも噂されている。

がしかし、今回のようなモバイルスーツを使ったテロ紛いの行いをするような連中ではなかったはずだ。彼らは基本的には話し合いという、至って冷静な手段で事を運ぼうとする。それが貧困層に人気な原因の一つなのだが、今彼らがやっていることはその真逆の行為だった。

フィーナが、内部分裂を指摘したのもそう言った背景があるからこそだったのだ。

「あー！ よかった、まだ居てくれた……。おい、ヴィーランドの旦那あー！」

「あ？」

と、レムスとフィーナが、イームを完全無視しながら出発の準備をしていた時、レムスの名前を呼ぶ男の声が飛んできた。

見れば、中肉中背の男が血相を変えてこちらに走って来るではないか。

「はあ、はあ……良かった……間に合った……ぜえぜえ……」

その男は、レムス達のところまで来ると、ホッとしながらも息を整える。どうやら運動不足のようだ、まあ体型からよく分かることではあるが。

「あんたは……」

「へえ、軌道エレベーターの物資搬入部門の責任者をさせてもらってる、ダグナ・ローファいうもんです」

如何にも中間管理職をしているという風体のダグナ。彼が軌道エレベーターに集まる物資の搬入を取り仕切っているらしい。

ということは、今まさにイームに乗っているグラズヘイムの戦士（自称）達がバイオチップの引き渡しを通告した相手ということだ。

「その責任者さんが、私のレムスに何のようかしら？」

「おい、いつから俺はお前のものになったんだ？」

「決まってるじゃない。初めて会ったときからよ」

「……………」

さも当然のように答えてくるフィーナ。此処でツツコミを入れてしまえば、話が前に進まないの、レムスは頭ではチップネットワーク経由で、モビルスーツ移送許可の書類を捌きながらダグナに話を聞くことにする。

「で、俺に何のようなんだ？」

「決まってるでしょ、あの馬鹿共をこの町から追い出して欲しいんでさあ！！ いや、寧ろとっ捕まえて、あいつらがビームライフルで壊した区画の弁償をしてもらわんと困るんでさあ」

「なんで俺が……………。他にもモビルスーツ乗りは居るだろう……………」

と、レムスは周りを見回しながらそう言う……………。しかし、彼の言葉に反して周囲にはそれらしき人物も、モビルスーツも存在していなかった。

平日の昼間のグラムであれば、探さなくても嫌と言うほどモビルスーツを移送するトレーラーは走っているし、PMC所属のモビルスーツ乗りだってその辺を闊歩しているものだ。

だがしかし、今日・この日に限っては、それらの人もトレーラーは一台も走っていないのだ。

「今気がついたんだが……………。今日は勤労感謝の日か何かなのか？」

「いえ、普通に平日でさあ……………。今日はね、軍からの特例であるあ

んたを除いて、この町にモビルスーツは入れない日なんでさあ」

「はあ？　なんだそりゃ？」

モビルスーツが町に入れない日など、コレまで一度たりとも無かった……はずだ。少なくとも、レムス達が軌道エレベーターを使う日などに、そのような異常事態に陥ったことはなかった。

「それが……あんまり大きな声じゃ言えないんですがね？　何でも今日は、コロニー・グリトニムから、お偉いさんが降りてくるらしくてねえ……。景観の問題になるからって、今日限定でグラムの軌道エレベーターの使用と、町への立ち入りを制限してるんでさあ」

「ああ……、あの独立国の建てたコロニーのか……。確か、かなり優秀な技術者が居るとかで、軍事産業とかでも有名なところだったな……」

「へえ。連邦政府も、あそこを上手いこと取り込みたいんでしょう。だから、今は連中に対して低姿勢なんですか」

どうやら、グラムの町にモビルスーツや、パイロットの検索件数ゼロ状態の原因は、政治上の体面を繕うための連邦からの命令らしい。そこを、『タイミング良く』バイオチップの搬入を聞きつけた輩が、『タイミング良く』襲いやすい今日、モビルスーツでご登場なされたというわけだ。

話が上手すぎる。

「どうやら、中でゴチャゴチャしてんのは、グラスヘイムだけじゃないっぽいな？」

「お、お恥ずかしい限りで……。どうも、情報を流している輩がこちらにも居るようで………」

レムスの指摘に、ダグナは少し薄くなり始めた頭を掻きながらそう答える。どこの組織も一枚岩であり続けることは難しい。人間という労働単位、戦闘単位が膨れあがるほどに、組織というものは中身が柔らかくなってしまふものだ。

「恥を忍んで、ヴィーランドの旦那にお願いしやす！ あの手中を何とかしてくれませんかねえ……？」

「悪いが、俺はPMCの人間なんぞでな。ただ働きしたら、ボスに拳骨食らわされるんだよ。……。それなりの報酬があれば別なんだがな」

ダグナの頼みに、レムスは事もなげにそう言う。つまり、『何とかして欲しければ、金を積み』ということだ。

モビルスーツを動かすのもタダではない。ドライヴへのエネルギー補給や各部位の整備など、諸々の費用が掛かってしまう。PMCはビジネスだ、ただ働きは原則的にも暗黙的にも御法度なのである。

前例が出来てしまえば、それに群がる輩も出てくる。特例を作ってしまうば、それはPMC業界全体にまで迷惑を掛けることにも繋がりがねない。

「それはもちろん心得ておりますあ。あのモビルスーツ三機の撃破で……。このくらいで勉強させていただくつもりでさあ………」

ダグナは、言いながら小さな紙をレムスに渡してくる。その紙は連

邦銀行の小切手であり、金額の欄には大量の0の文字が並んでいた。金額的に言えば、モビルスーツの開発費並みの報酬である。

「ほお、話が分かるじゃないか。」

「ええ、もちろんでさあ。あの名高いPMC『スレイプニール』のエース、レムス・ヴィーランドに端金を渡して仕事を頼んでちゃあ、ウチとしてもいい笑いもんでさあ。今後ともご贔屓にという意味も込めて、今回はそのお値段で……」

どうやら、PMC『スレイプニール』も中々に有名になりつつあるようだ。レムスが加入したのは、5年前。フリスベルグを受注したのが2年前といったところである。

スレイプニールは、少々お高いが仕事の質が高いと言うことで、金持ち層からの受けが特にいい。報酬が高い原因は追々話すとして、レムスは気がつけばそのPMCのエースのような扱いになっていたというわけだ。

本人にはその気は全くないが。

「分かった、引き受けよう。ボスにも、ここの軌道エレベーターのサービスの良さは伝えておくよ。快適なエレベーター、確かな物資搬入ってな」

「へえ、ありがとうございます!!」

交渉成立。ビジネスの世界においては、双方が勝者になることがもつとも好ましい。Win&Winの関係、綺麗事を言うつもりはないが、ある意味ではビジネスの鉄則とも言える。

「というわけだ、フィーナ。ちょっと遊んでくるから、お前はその辺で茶でも飲んでろ」

「はい、はい。でも、あんまり待たせないでね、レディーは時間にルーズな男は嫌いなもの」

「ああ、分かってるさ。思い切り『のんびり』戦ってくるよ」

「むう……………」

レムスは、フィーナとの軽い掛け合いを交わしながら、フリスベルグのコクピットハッチを開く。パイロットスーツは……………まあ必要ないだろう、所詮は宗教家に毛が生えた程度の連中である。

レムスが後れをとることはまず無い。これは驕りでもなければ油断でもない、ただの客観的な分析の結果である。

「んじゃ、行くか。相棒」

レムスはシートに体を預けながら、フリスベルグと自身のバイオチップに記憶されているバイオメトリクスを照合させ、各部の起動を開始した。



『30分が経過した。そちらからの回答がないという事実により、我らは武力行使によるバイオチップの回収を行う。』

『以後、交渉に応じるつもりはない。我らは、バイオチップの脅威

から人々を守る。これはその大いなる大義の下で行われる正義の行為である』

最初の通告から30分が経過した。軌道エレベーター側からの、テロリストに対する返答は無し。

まあ、グラスヘイムの戦士（自称）達はこうなると分かりきっていたのだが。

「へへ……兄貴、こりゃ楽勝っすね。向こうはびびって何にも手を出してこないっすよ」

「当然だ。事前に流してもらった情報が正しいのなら、このグラムには今日だけはモビルスーツが居ないのだからな。」

「このモビルスーツ……。グラスヘイムのやつらのだし、表向きは宗教集団の犯行って事で捜査は進むだろうしな……。はっ、俺らは手に入れたバイオチップを裏ルートで高値で売り払って、報酬をいただく……。」

「完璧な作戦っすね。これで明日からは億万長者っすよ!!」

会話から分かるように、イームに乗っているこの連中はグラスヘイムの信者ではない。ただのゴロツキだ。

偶々、グラスヘイムのシンボルのなぞんざいであるイームを手に入れることが出来た彼らは、闇市で手に入れた、グラムへの権力者の来航のためにモビルスーツを乗り入れを制限するという情報と、バイオチップの搬入の情報を利用し、今回の犯行に及んだに過ぎない。

要するに、グラスヘイムは今回の件に関しては、全くの無関係というわけだ。

「さてと…………お前ら、搬入口のハッチを壊すぞ。」

「了解っす!!」

「モビルスーツがあれば楽勝だな…………」

そうして、三機が軌道エレベーターの物資搬入口にビームライフルの銃口を向ける。それなりの強度は保証されている搬入口のハッチだが、流石に三機のモビルスーツの攻撃を防ぐのは難しいだろう。

イームに搭載されているアルタドライブという、レムスの機体に搭載されているのとは別の種類の動力炉から抽出されたエネルギーが、ビームライフルに送電される。アルタとは、サンスクリット語で『富』という意味らしい。一般的なモビルスーツに搭載されている動力炉は、全てがこのタイプである。

イーム自体は二世代ほど前の機体であり、スペック的には戦闘には不向きなのだが、ハッチを壊す程度なら十分な火力を持っている。

が、ビームライフルから火線が放たれることはなかった。

ドオン!!

「うわあああ!!?」

「「なっ!?!」」

突然、三人の中で一番下っ端な男の乗るイームの右腕部が爆散し、次に左腕部、右足、左足と順に薄紅色のビームに貫かれ爆散してい

まった。

下っ端のイームは手と足を失い、だるま状態になって地面に転がった。どうやら、パイロットは無事のようなのだ。

「上か!!?」

「何だってんだよ!! 今日にはモビルスーツが居ないんじゃないか?」

ビームの飛来した方向、つまりは上空に視線をやると、ゴロツキ達の視界に青と白の二色をメインカラーとし、翼を模した機構を背中に備えたモビルスーツが、ビームライフルをこちらに向けて空高くに滞空して居るではないか。

モビルスーツ、ガンダムタイプ・フリสบエルグ。

あれこそが、レムスの駆る機体であり、PMC『スレイプニール』のエースの相棒である。

『えー……無駄だと思うが、一応警告だけはしておく。今すぐ武装を解除しろ、そうすればまだ突発的な犯行だとして、情状酌量の余地はある。そこのダルマみたいになりたくないなら、よく考えるんだな』

フリสบエルグのコクピットから、レムスが残りのゴロツキーズ二人に警告メッセージを発する。ライセンスを持っていない輩のモビルスーツのようは重罪に当たるが、とりあえずこうでも言わないと説得の意味がない。

「おい、あれ…………あのモビルスーツ…………【ガンダム】じゃねえのか??」

「ってことはお前…………あれって…………スレイプニールのところの奴って事かよ!!?」

ゴロツキ達の情報網でも、スレイプニールのこと、ガンダムのことはかなり知られているようで、男達はイームのコクピットの中で冷や汗をかく。

スレイプニールとガンダム、PMC業界のビッグネームでもある組織が目の前に立っているという事実、ゴロツキ達は縮み上がりそうになる。

「い、いや…………怯む必要はねえ…………。俺たちはまだ二人居るじゃねえか。二対一で挟み込んじゃえば、いくらガンダムだってよお!!」

「あ、ああそうだな!!! 俺たちだって、同じモビルスーツに乗ってんだ! 二対一なら勝機はあるぜ!!!」

と、ゴロツキ達は数の優位性から砕けかけた戦意を取り戻した。

先程の攻撃も不意打ちに近い。ともすれば、挟撃に持ち込めばあるいはという甘い考えが彼らの頭の中にはあったのだ。

「ガンダムを倒したってなりゃあ、俺たちの名前に箔が付くってモンだろうがあ!!!」

「PMCのトップクラスに位置するスレイプニールの一員をやったとなれば、どっかのPMCからスカウトでも来るかもなあ!!!」

二機は、勢いに乗ってレムスのフリスベルグに左右からの挟撃を仕掛けてきた。イームのスラスターは大気圏内での飛行には向いていないが、多少の時間内であれば飛行くらいは出来る。スラスターの出力を全開にして、二機のイームがレムスに襲いかかる。

「投降の意思無し……と……。残念、撃墜決定だ」

レムスは短く呟くと、フリスベルグのフットペダルを踏み込む。

「「死ねえやあああああ!!!!!!」」

ゴロツキ達のイームはビームサーベルを振りかぶり、左右から同時にレムスに攻撃を仕掛ける。タイミングに関してだけなら、素人にしては上出来だと言っておこう。

が、フリスベルグが一瞬で視界から消えたことで、男達の挟撃は失敗に終わった。

バシユン!!

「「は?」」

挟撃が失敗に終わったことで、ゴロツキイームはお互いのビームサーベルで、お互いの腕部を切り裂いてしまう。コクピットの当たらなかったことは幸いだとも言えよう。

「まずは一人」

そして、彼らの視界方消えたfrisベルグはさらに上空に飛び上がっていた。それでも、frisベルグのスラスター性能が故の機動性の全力からはほど遠い。

frisベルグは手にしていたビームライフルを背中側の腰に納める。それと同時に、素早く左右の腰からビームサーベルを二本抜き、未だにフリーズしたままのゴロツキ達のイームの片方を切り裂いた。

「うわああああ!!!??」

腕と、背中のスラスターを切断されたイームは地上に真っ逆さまに落下していく。落下する先は平原区なので人的被害の心配はないだろう。高度的にも、モビルスーツに乗っているのならば、パイロットの命も保証できる。

「て、てめえ、よくも俺の兄弟を!!!」

「ああ、やっぱりお前らガラスヘイムとは無関係だったのか。道理で敵意が薄汚いわけだ……」

最後の一機を前に、今回の事件の裏側にガラスヘイムが無関係なことを確認したレムス。まあ、事後の処理は管轄外なので、ダグナにでも任せておけばいいことなのだが。

「ぶっ殺してやr……」

「ああ、そういう暑苦しいの要らないから」

二対一のアドバンテージを失ったにも関わらず、単機で特攻を掛けてくる最後のイーム。

冷静さを失っているのか、それとも恐怖でどうにかなってしまったのか。

そんなことはどうでも良いとばかりに、レムスはフリスベルグを操ってイームのビームサーベルを易々と交わし、懷に潜り込んだところで蹴りを放ち、イームを地上に叩き落とした。

「ぎゃあああああ！！！！？？」

先程と同じ平原部に落下した最後の一機。

落下したと同時に、システムダウンでも起こしたのだろう、それ以降は動く気配は皆無だった。

「依頼完了だ。さてと、さっさと戻るか……」

レムスは事もなげにそう呟き、フリスベルグを反転させ、ダグナとフィーナが待っているであろう広場まで帰投することにした。

グラムの町の入り口には、ダルマ状態になったイーム。そして、平原部にはズタボロになったモノと、地面にめり込んだ状態の機体が残され、軌道エレベーターの警備部隊が犯人確保のために大挙していた。

そして、イーム三機を撃墜し、何事もなかったかのように中央広場まで飛んでいくガンダム姿を見て、警備部隊の一人が呟いた。

「アレが……ガンダム……。スレイプニールのガンダムタイプモビルスーツか……。ここまでだとは……………」

その警備員はしばらくの間、飛行するフリスベルグをただただ見つめていることしかできなかった。

Act. 2 スレイプニール（後書き）

F20C「と言うわけで、戦闘シーンだったわけですが……。上手く伝わったでしょうか？」

レムス「自信がないのか……」

F20C「いやだってね……。モビルスーツの戦闘って初めて書くで……」

レムス「なのは小説で戦闘シーンたくさん書いてるじゃないか」

F20C「やっぱり、生身の人間とMSは違うというか……」

レムス「デリケートな作者だな、おい……」

次回 Act. 3 『アリシア』

A c t. 3 アリシア（前書き）

てなかんじで第三話でございます。

最後らへんで、この作品でのロリ担当のアリシアが登場致します。

イメージC Vは竹達彩奈さんです。（けいおん！の中野梓役、俺の妹がこんなに可愛いわけがないの高坂桐乃役などなど）
脳内変換全開でお願いします。

では、A c t. 3をどうぞ！

Act. 3 アリシア

「流石はスレイプニールのエースパイロットでさあ！！ 三機相手に3分も掛かってないなんて……………」

レムスがフィーナ達のところに戻って、最初に掛けられた声がダグナからの賞賛の言葉だった。スレイプニールのパイロットを務めるということの意味をダグナはよく分かっているらしいが、まさか此処までだとは予想できなかったのだろう。

「機体性能が良いんだよ。相手は二世代も前のMSだ。これで負けてたら、俺はスレイプニールを辞めなきゃいけないよ」

「ご謙遜を……。素人の私から見ても、旦那の技量はあんなゴロツキ共とは次元が違うと分かるくらいでさあ」

フリスベルグをトレーラーに再び乗せ、今度こそ帰る準備を終えるレムスとフィーナ。少々ドライブのエネルギーを消費してしまったが、微々たるものだ。今回の報酬を考えれば安いものである。

「担ぐなよ。俺は技術をひけらかしたい訳じゃないんだ。ビジネスとして、依頼を受けて、報酬をもらってるんだからな。常に最高の仕事をするのが当然だろ？」

「これはこれは……。仰るとおりで。あ、残りの後始末はこちらでやっておきます。今回の件についての報酬の支払いや、申請書類などは後ほど送らせていただきますので」

「ああ、よろしく頼む。アドレスはスレイプニールの本部宛だな。」

レムスはダグナとの事後商談を終えると、トレーラーに乗り込む。助手席には既にフィーナが乗り込んでおり、ご親切にシートベルトをして待っていた。

レムスが運転することは決定事項だったらしい。まあ、一々文句を言うつもりもないが。

「畏まりやした。ヴィーランドの旦那、今日は本当にお世話になりやした。スレイプニールのボスにもよろしくお伝えくたせえ」

「ああ。また何かあったら言ってこい。依頼って事なら力を貸す」

レムスは、ダグナにそう言い残してトレーラーのアクセルを開け、軌道エレベーターを背に街を出発した。



「ホント、レムスって自己顕示欲って言うものが希薄よね。」

「あ？」

街を出発して20分後、窓の外を流れる景色を見ながら、突然フィーナがそう言ってきた。マシンガントークな女ではないが、決して無口というわけでもない。こうして同じ車に乗っているのだ、話しかけてくることなど珍しいことではない。

だが、レムスはフィーナの台詞の意味を測り損ねていた。

「さっきの戦闘だって、ダグナの言ってた通り、あなたの技術が高いからこそその結果。確かにフリスベルグのスペックは間違いだけど、あの機体は特別だからとてもピーキー且つ、操作が敏感。並のパイロットじゃまともに歩かせることも出来ない」

フィーナは淡々と、客観的な視点から見た考えを言ってくる。この女の恐ろしい所の一つは、主観性と客観性の切り替えの早さと、その精度である。

普通、人間というものは主観的立場でものを考える。特に、自分に関係のある事柄については、人は主観的な立場を捨てきれないものだ。

客観性を保とうとしても、画用紙に付いた小さなシミのような主観性が残ってしまう。そしてそれが、客観性を阻害する。

要するに、人はどこまで行っても自分の中の物差しでしか物事を測ることは出来ないということだ。感情というものは、主観性の塊のようなもの。その感情を身に宿しているのだから、人間は主観的思考を捨て去ることは出来ないのだ、絶対に。

「あなたなら、イームに乗っててもあの三機を下すことは可能だったはず。フリスベルグの性能云々を除いても、あなたの技術はそれを補って余りある」

「何が言いたいんだお前は」

主観的思考に支配される人間であって、フィーナは客観的思考を難なくこなす。恐らく、主観性という小さなシミのサイズが、ナノレベルまで圧縮されているのだろう。

それが、彼女のイメージ、どこか冷たい印象を与えることに繋がっ

ているのかも知れない。

無論、彼女だって笑いもすれば泣きもする。怒ったり寂しかったりと、普通の人間と同じような忙しない女なのだ。

「レムス、あなたって……………恥ずかしがり屋？」

「……………」

レムスは黙ってトレーラーのステアリングを握る。中途半端な力で握っていると、道を逸れてしまいそうになったからだ。

フィーナの言動には、たまに難解な部分があるが、今回がそれに当たる。モビルスーツの性能、パイロット技術の話から、どこをどう繋げば恥ずかしがり屋という単語が出てくるのか、皆目見当が付かなかった。

「本当に……………本当にたまになんだが……………。俺はお前という人間が分からん時がある」

「ミステリアスな美女って事かしら？」

「自分で美女ってつけるその脳みその中身がどうなってるのかも分からん」

段々と頭痛がしてきた。

フィーナのペースに引き込まれている証拠だろうか。兎に角、もの凄く精神的に疲労してしまう。

「私が言いたいのは、どうしてそこまでの腕を持っているのに、人

に雇われてるのかって事。私てつきり、あなたが人前に出るのが苦手だから、誰かの下で働いてるのかと……」

「そんなつもりはない。というか、恥ずかしがりでもない。俺がボスの下で働いているのは、単純に恩義があるからだ。それに、待遇も申し分ない。独立して何かをする事に、何のメリットも感じない。ただそれだけだ」

レムスはフィーナの疑問にそう答えた。何の迷いもない、ただの本心だ。

そして、質問してきたフィーナはと言うと……

「あらそうなの？ ふふ……これでまた一つ、あなたのことがよく理解できたわ……」

自分で勝手に納得していた。

しかも、もの凄く満足した笑顔で。

「（何なんだこの女は……。いや、深く考えるな、フィーナのこゝとを深く考えるな。それこそ蟻地獄にダイブするようなモンじゃないか）」

「今、何か失礼なことを言われたような……」

「……気のせいだろう」

レムスは運転から来る疲れではなく、精神的な疲れをいち早く取り除きたいと思い、トレーラーのアクセルをもう一段階深く踏んだのだった。

この女には一生勝てる気がしない、そんな考えを蹴り飛ばしながら。

「（一生って……。そこまで面倒見るつもりなのか俺は？　まずいな、本格的に疲れているのかもしれない……）」

レムスの悩みは深まるばかりであった。



グラムからちょうど150キロほど離れた街、ウートガルズ。地球のヨーロッパ大陸の中央に栄える街で、ヨーロッパ最大のPMCであり、レムスが所属しているPMC『スレイプニール』の本部がある場所でもある。

商業と農業が融合を果たしたハイブリット都市として、常に人が、物資が、情報が忙しく行き交っている街でもある、ウートガルズ。そんな混沌とした中であって、この街での犯罪発生率はヨーロッパ随一の低さを誇る。その原因、犯罪の抑止力としての力を持っているのもまた、スレイプニールである。

この街において、スレイプニールは恐れられる存在であると同時に、頼りにされる存在で、民衆からの支持は厚い。温暖な気候と一定の平和、加えて農業に従事しているおっちゃん&おぼちゃんの太陽の如きさわやかな笑顔、一言で言えばこのウートガルズは楽園である。

「ボス、今帰った」

「おお。ご苦労だったな、レムス」

そんな楽園都市、ウートガルズの中央区に居を構えるスレイプニール本部。レムスは乗ってきたトレーラーをMSハンガーに駐め、先にスレイプニールのオーナー・ヴァーリ、通称ボスに報告を入れておくことにした。

ヴァーリの容姿を一言で表すと、昔気質な職人と言ったところか。そして、そのイメージは大方当たっていて、彼はスレイプニールのオーナーであると同時に、MSのエンジニアでもある。エンジニアにしては、かなり強面だが。

昔は連邦軍で仕事をしていたらしいのだが、軍の怠慢ぶりに嫌気が差したとかで、PMCを設立したとのことだ。

彼のMS開発チームの腕はピカイチで、恐らく軍のそれよりも格段に上であり、レムスの愛機・フリスベルグも彼らの力作である。

加えて、ここでスレイプニールへの仕事の依頼料が少し割高な理由について話しておこう。

まあ、単純に言えばMSの開発費用が馬鹿高いというのが、ストレートな理由である。

スレイプニールのMSは、殆どがガンダムタイプだ。それも、どれもが特別なパーツを使っていたり、パイロットの癖に合わせてかなり細かいところにまで気を配ったりと、資金はいくらあっても足りない。

フリスベルグで言えば、動力炉であるザルヴァートドライブと、何やら小難しい名前のフレームなどなど、兎に角MSに金を掛けまくっているのだ。

詰まるところ、料金が割高な理由は、そんなところだ。

が、MSの性能の高さ、パイロットの腕等々の、総合的な評価の高さ故なのか依頼は毎日のように飛んでくる。金持ちからの依頼が多いが、無論一般市民からの依頼も受ける。客を選ばないと言う点も評価されているのだろう。

「フィーナの奴はどうした？」

「あいつならfrisベルグを見てくれるよ。ドライブ周りの部品の様子を見たいんだと」

「そうか。まあ、フィーナになら任せておいても平気か……」

フィーナの得意分野は、レムス虐めだけではない。彼女はMS工学に精通しており、エンジニアとしても優秀だ。

その腕は、ヴァーリも一目置くほど。加えて、MSの操縦もある程度出来ると来たものだから、その容姿と相まって仲間内からは『理想の嫁』だの、『完璧美女』だとか、アホみたいな呼び名が付いている。

その彼女に慕われているのだ、レムスに対するやつかみや嫉妬は日常茶飯事であることだけは容易に想像が付くだろう。

フィーナと出会って2年近く経つが、未だに驚かせられることは多々ある。

「そういえば。軌道エレベーターのダグナって奴から依頼の事後申請と、報酬に関する報告書が来ていたぞ。」

「ああ。いきなりの依頼だったんだが、報酬が良かったんでな。勝手に受けさせてもらった。」

「なあに、良いって事よ。俺から見ても、あの額の報酬なら受けるべきだと判断してたろう。逆に、断りでもしようもんなら拳骨だったな」

どうやら、依頼を受けて正解だったらしい。数時間前の自分を褒めてやりたくなったレムスだった。

ヴァーリが蓄えた顎髭を触りながら話すと言うことは、かなり良い仕事だったと言うことがハッキリ分かる。

「ジグとフラン：あとベルはどうしたんだ？ 姿が見えないが」

「ジグとベルの二人なら中東紛争のバックアップに行かせた。支部からの要請でな、どうやら紛争が終盤戦に向かってるらしくてな。最後の追い込みって奴だ」

ジグとフランというのは、どちらもスレイプニールのガンダムパイロットである。ジグはレムスの4つ年上の男性で、狙撃手として能力はずば抜けている男である。個人としては、ただの女好きでお気楽な性格の男という評価を下したいところではある。

ベルはレムスの二歳年下の青年であり、近接戦闘に特化した戦闘スタイルを得意としている。彼の愛機もそれに合わせて開発されたものであり、近接戦ではスレイプニールのトップクラスの腕を持つ。性格は頭に花畑でも咲いているのではないかと疑いたくなるようなお人好しだ。争いごとを好まない奴ではあるが、MSに乗れば戦士として有能な活躍を見せてくれる。

「フランは今、宇宙に上がってる。コロニーへの物資搬入、その警護だ。お前とは入れ違いになったようだがな」

「なるほど。道理で本部のMSハンガーにガンダムが一機もないわけだ。」

フランは、1つ年下の女性で、主に後方支援を仕事としている。彼女のガンダムもまた、後方支援向きの機体であり、戦闘状態やフィールドでの敵の位置取りなど、情報戦において重宝する人材である。

「中東の方に行った、ジグ達にギリング部隊も一緒に連れて行かせたからな。確かにハンガーはガラツとしてるだろうな。」

「ま、紛争が終わるかどうかって瀬戸際なんだしな。当然と言えば当然か」

ギリングというのは、ガンダムタイプをベースに造られた量産機である。レムス達が乗るガンダムタイプは、どうしても乗り手を選んでしまう。それくらいにピーキー且つ、マシンレスポンスが過敏なのだ。

故に、ヴァーリによって開発されたのが、汎用機でもある『ギリング』である。性能は多少落ちはするが、一般的なパイロットでも難なく乗れる足回りの良さと、適応性の高さが最大の売りである。

加えて、性能が多少落ちると言っても、それでも連邦製のMSよりかは完成度と性能は上である。

「報告はそれくらいか？」

「ああ、詳細は報告書を見ておいてくれ。さっき送っておいた」

「おし、分かった。今日はもう上がって良いぞ。フィーナを連れて、今日はさっさと休め。明日からまた忙しくなるんだからな」

「了解したよ、ボス」

ヴァーリの厚意に、今日のところは有り難く甘えておくことにするレムス。実際、宇宙と地上での連戦、そして此処までの運転で疲労はピークに来ていたのだ。

本当なら、フリスベルグの整備を手伝おうかとも思っていたのだが、そこはフィーナが上手くやってくれているだろう。

その点だけでは、今日のところはフィーナに感謝しておくことにした。



「おーい、帰るぞ、フィーナ」

「ちょっと待って。……このラインを交換して……ここを……
…こうつと……」

レムスはヴァーリの私室を後にすると、フィーナに声を掛けた後、トレーラーに置きっぱなしにしてあったスレイプニールの制服を引っ掴んで羽織る。

ロングコートタイプの制服だが、素材が良いのか着心地は抜群である。

「お待たせ」

「いや、いい。ドライブの調整をしていてくれたんだろ？」

「まあね。ちょっと所々、へばり気味のパーツとかの交換をね。」

本当に、この女の技量には驚かされる。ザルヴァートルドライブの設計図を以前、ヴァーリに見せてもらったことがあるが、複雑なところの上なかった。

メカにも少々強いつもりだったレムスでさえ、頭に？マークが付くほどに。しかし、フィーナはそれを理解した上で、パーツの交換などはお手ものと言わんばかりの働きをしてしまう。

やはり、専門分野は専門家に任せるのが一番なのかも知れない。

二人は、他のスタッフに声を掛けたのち、連れだって本部を後にした。向かう先は、レムスの家、この近辺ではそこその経済力がなければ住めないようなマンションの一室が彼の、いや彼とフィーナが住んでいる場所である。

スレイプニール本部からは、歩いて約10分。立地条件としても申し分ない。

「おや、レムス帰ってたのかい？」

「ああ、今さっきな。ちょっと、宇宙^{そら}までゴミ掃除だよ」

本部を出て数分すれば、マンションに続く大通りが出る。大通りでは、様々な食材や物資が販売されている。

声を掛けてきたのは、市場のおばちゃんである。スレイプニールの

ガンダムパイロットであるレムスはこの辺りでは有名人なので、こうして気軽に声を掛けられることは多い。

「フィーナがアンタの後を追っかけて行ったときは何事かと思ったけど、無事で何よりだよ」

「こいつはただ単に遊びに來ただけだったけどな」

「なによ、ちゃんと機体の整備してあげたじゃない。そこら辺は有り難く思っただけだし」

無論、フィーナのことも知られているので、彼女も普通に会話をしたりする。

レムスは、基本的に地球の重力は好きではないが、こういう人間の温かみというものは嫌いではない。

「痴話喧嘩もほどほどにね。ほれ、これ持ってきた」

「誰と誰が痴話喧嘩だっけ？…とと…こりゃあ焼きたてかい？」

「さっき焼いたばかりさ。おまけだよ」

「そいつはどうも。有り難くもらってくよ」

おばちゃんがくれたのは、焼きたてのパイだった。一囓りもすれば、まだ熱を持っているパイ生地が体の温度を上げてくれる。

時刻は夕方と言うこともあり、少し冷えて来始めていたので、有り難いおまけだった。

レムスとフィーナは、気前の良いおばちゃんにお礼を言って、パイ

を頬張りながら家路につく。

途中、先程と同じ感じで街の人間に声を掛けられ、どこでドンパチやらかしてきたのかを聞かれたり、フィーナとの仲をからかわれたりと10分の帰宅時間が予定通りに進まなかった。

「この町も、少し離れたただけだが全く変わらん」

「地球よりもコロニーの方が居心地良いのは本音だけど、この街は私も好きだわ」

二人は、小さな平和を実感しつつ、足を進める。

がしかし、平和の中にあっても、生まれてくるのが物騒な事件というものだ。レムスとフィーナの帰宅時間がさらに遅くなる事件が、裏路地で起きていた。

「い、やっ！！！ は、離して下さい！！！！」

「かぁー！！！！ 離して下さい、だってよぉ♪ 良いね良いねえ……そう言う声で泣かれると、逆に興奮しちまうよ俺」

「でも、見かけねえ顔だなあ？ もしかしてよそ者かあ？ だってら、この街でのルールを手取り足取り教えてやんよぉ。」

いくらウートガルズが犯罪件数が低い、比較的平和な街だと言っても、犯罪の種が皆無なわけではない。

昼間にレムスが病院送りにした、グラムを襲ったチンピラのような輩が、ここウートガルズにも居るのだ。

ウートガルズ産のチンピラは、ぱつと見10代前半の金髪をツートールにした少女を囲んで、その華奢な手を掴み、まるで値踏みするような目を向けていた。

十中八九、体目当てだろう。

「はぁ……やれやれ」

「と、言いつつも、可愛い女の子は助けずには居られないレムスなのであった」

「変なモノログを入れるな」

少女が大の大人二人に絡まれているのだ。面倒だが、助けてやらなないと目覚めが悪いと思ったレムスは、裏路地に入っていく。フィーナのモノログ（棒読み）にツツコミながら、スタスタと男達の方に歩いて行った。

「へへへ……いいじゃねえかよ……ただのガキから、大人にランクアップできるんだぜえ？」

「まあ、まだまだ発育途中っぽいけどなあ。ぎやははは……!!」

「や、やめて!!!! 変なところ触らないでください!!!!」

チンピラ改め、変態ロリコン共は、ますます少女へのボディタッチを進めていく。どうやら、いろんなものが大分堪っているようだ。

「おい、ロリコン共。その辺にしとけ」

「ああ？」

「何だってんだ？ 俺たちを誰だと思って……………」

レムスの声に、変態ロリコン×2はこちらを威嚇するような目を向けながら、凄んでこちらに顔を向けた。

そして、声の主がレムスだと分かると同時に、彼らの表情は凍り付いた。

「誰だと思って……………なんだ？」

「れれれれ、レムス・ヴィーランド……………????!」

「ば、馬鹿お前!!!! 殺されてえのか!!!!?」

レムスが続けてそう問いかけると、さらに変態共は縮み上がってしまふ。スレイプニールの名前は伊達ではない。言ってしまえば、ウィートガルズはスレイプニールがシメているようなものなのだ。

「へへへ…………これはヴィーランドの旦那……………いつお帰りで？」

「今さっきさ。で？ お前らは年端も行かないガキを相手に何してやがるんだ？」

「ええと、これはですね!!!! そう、この子が道に迷ってたんで、俺たちは案内を……………」

「ほお、道案内するのに、ガキの貧相な胸を触る必要性があるのか？」

「ひ、貧相……………」

貧相な胸という評価に、金髪少女は地面に崩れ落ちた。まあ、年齢が年齢なので、将来に期待してもらうしかない。

チンピラ達は、レムスに苦しい言い訳をするが、無論そんなものはレムスを欺けるはずもない。

「やれやれ……。今回に限っては見逃してやる。そんなにやりた
いんなら、お前ら二人でケツでも掘りあってるんだな。今度同じよ
うな事があれば……。お前らの貧相なモンに鉛玉をぶち込む」

「はははは、はいいいいいい！！！」

「し、失礼しやすううう！！！！」

レムスが睨み付けながらそう言うのと、チンピラ二人は半べそをかき
ながら、一目散に逃げていった。

どうやら、レムスの表情から、冗談で言っているわけではないと言
うことが分かったようだ。

「すまなかったな。この街にも、ああいう馬鹿が居るんだ。一応、
釘は刺しといたから、今回は勘弁してやって欲しい」

「い、いえ！！！！　とんでもないです、こちらこそ助けていただい
て、本当に有り難うございます！！！」

金髪少女は、慌てた様子で首をブンブン振りながら恐縮したような
態度になる。レムスは一応、気を遣って優しく言ったつもりだが、
他人がそれをどう捉えるかは他人次第である。

「でも、あなたもあなたよ？　こんな裏路地を、女の子一人で歩くなんて、襲って下さいって言ってるようなものよ？」

「で、でも、私なんか、まだ子供で……ひ、貧相で……胸パッドを……」

フィーナの忠告に、信じられないような表情で、且つ先程のレムスの貧相な胸発言のダメージを引き摺りながら、金髪幼女は力なく呟く。

「覚えておきなさい。世の中にはね、いろんな趣味嗜好を持った人間が居るの。実の姉にしか欲情できない奴や、あなたみたい子供にしか興味を持ってない人、レムスのようにミニスカメイドコスプレをした私にしか欲情できないタイプも……」

「待て。俺の性癖を勝手に決めつけるんじゃない。ついでに、俺の社会的地位を脅かすな」

「あら、素直じゃないわね」

レムスは生まれて初めて女に泣かされるところだった。

が、そんな二人のやりとりを見て、多少緊張が和らいだのか金髪幼女は表情を柔らかくして、少し笑った。

「あはは……お二人とも、仲がよろしいんですね？」

「君は一度眼科に行った方が良い。これのどこが仲良く見えるんだ……」

「仲が良いなんてものじゃないわ。レムスは毎日のように私を求め

て、その熱いパッションを……」

「お前はいい加減に黙ってろ」

「むきゅ」

あまりにフィーナがお喋りなので、レムスは彼女の口に手をやって口を閉じさせた。このままでは、話が一向に前に進まない。

「それで？ 見たところ、君は此処の街の人間じゃないようだが……？」

「あ、ええ、はい……。ちょ、ちょっと……観光で……」

レムスの問いに、少女は視線を逸らしながら答える。明らかに嘘を吐いているのが丸分かりである。

まあ、この年頃の子供に完璧な嘘を吐くような技術を求めることの方が間違っているが。

「……観光……ね……」

「は、はい……。そ、それで……ちょっと、行かなければならない場所があるんですけど、道に迷ってしまっ……」

「行きたい場所？」

目的地があって、道に迷ったと言うことは本当のようだ。観光という嘘はひとまず置いておいて、レムスとフィーナは、彼女が向かうとしていた場所を聞いてみることにする。

「ええと、ヨーロッパ最強のPMCと噂の……スレイプニールというPMCを訪ねたくて……」

「はい？」

こんな子供が、スレイプニールに何の用なのかと、レムスとフィーナは顔を向き合わせる。というか、嘘を吐くならPMCと観光では、整合性がとれないだろうに。その辺りは流石は子供と言うべきか。

「ええと。スレイプニールなら、俺がその組織の一員だけど……。君みたいな子供が、ウチに何のようなんだ？」

「え?! そうだったんですか!!? …… …… だったら、話は早いかな……? 」

その子は、小さく呟く。どうやら、訳ありのようだ。

レムスの中の何かが、面倒なことになるという予感を、警鐘を鳴らして彼に伝えてきた。

「あ、あの!!! 私、アリシアって言います!!! その……実は、スレイプニールの皆さんに依頼をしたくて!!! 」

ほらやっぱり。

レムスは、内心でそう呟いた。

これが、レムスとフィーナの、アリシアとの出会いだった。

Act. 3 アリシア（後書き）

レムス「というわけで、アリシアの登場回でもあったわけだが」

アリシア「レムスさん、酷いです……貧相だなんて……」

F20C「そーだ、そーだ。今後の成長を期待しないでどうするね？」

アリシア「あの、そういう意味で言った訳じゃないんですけど……」

F20C「今は小さいかも知れないが、数年後にはアレな感じに……」

レムス「流石は変態紳士……街中で偶然会っても他人のふりをしたくなるな」

F20C「orz」

次回、Act. 4『コロニー・グリトニム』

Act. 4 コロニー・グリトニム（前書き）

今回は、アリシア（幼女）の依頼内容のお話と、何やらきな臭いお話、危ないお話がメインでございます。

全てはここから始まった………みたいな感じですね。

最後らへんには若干ギャグも盛り込んであります。

綺麗な作品（内容的な意味で）を目指しているのに、四話目にしてご覧の有様だよ……！

今後の話の内容で勝負するしかない………

Act. 4 コロニー・グリトニム

いつの時代も、面倒事を抱えている奴は居る。そこに差をつけるとするなら、それはその面倒事の裏にある背景だろう。

イジメ・セクハラ・恨み・騙し・殺し……etcのような個人の色が強い背景があれば、横領や外交、核ミサイルやら生物兵器、領土問題やら人身売買等々、政治的または複数の人間が関わっている面倒事があるものだ、この世の中には。

だからこそ、今まさに目の前で入れたてのココアを容姿に違わない満足げな、それでいて子供っぽい表情で飲んでいる金髪少女にも背景に何があるかは不明だが、面倒事が乗っかっている。

P M C、スレイプニールに、力を以て事に当たってくれる連中に何かを頼もうというのだから、面倒事の背景にあるものは必然的にヤバイものだ。

「で、お嬢ちゃん？ 君みたいな子が、俺たちに何を頼もうってんだい？」

スレイプニールのボスであるヴァーリも、流石に此処まで若い、というか子供からの依頼を受けたことはなかったが、とりあえず話を聞いてみる。

アリシアと名乗った少女は、帰宅途中のレムスとフィーナに連れられて此処、スレイプニールの本部に連れて来られた。

出会った裏路地で立ち話というのもアレなので、とりあえずヴァーリに話を聞いてもらうことにしたのだ。

依頼にしても何にしても、今回のような怪しげな一件を、レムスの一存で判断するわけにはいかなかった。

「ええと……連れて行って欲しいところが……あるんです……」

「連れて行って欲しいところって言うところ……運びの仕事というところかい？」

「そんな感じ……です。」

アリシアはヴァーリの質問に、少し落ち着きなさげに答える。明らかに何かを隠しているのがバレバレである。

しかし、ここで無理に話を引き出そうとするのは間違いだ。相手が大人ならそれでも良いが、今日の前にいるのは子供、まだ10代に成り立てのである。

強引に行けば、黙りになってしまいかも知れないからだ。

「まあ、運び屋の仕事もやってない訳じゃねえ。だが、それなら他のPMCを当たっても良いんじゃないか？　運び専門の奴らも居る。料金だって、そいつらの方がお得だぜ？」

「それは……そうなんですけど……今回はちょっと、荒事と言いますか、暴力チックな事が付きまとうと言いますか……」

何ともハッキリしない答えだが、荒事ということは戦闘関連の依頼も込みで、ということだろうか。

運びたいものがあるのだが、その荷物が曰く付きなのか、世の中にとって重要なもので、それを奪いに来る奴が来るかも知れないから、戦闘能力の高いところに依頼したい。まあ、一応筋は通っている。

「要するに、戦力としてのスレイプニールも欲しいって言うことかしら？」

そう言ったのは、黙って話を聞いていたフィーナだった。レムスはと言うと、ソファに寝転がって新聞を読んでいる。

バイオチップネットワークを使えば、電子化された新聞を読めるのだが、彼はこれに限っては手元にあるなら、アナログな方を選択するのだ。

「そうなります……。多分、怖い人たちが邪魔しに来ると思いますから……」

「怖い人？」

「それは積み荷が目当ての人？　それとも、あなたが目当ての怖い人たち？」

アリシアは、少し怯えた様子でそう呟く。怖い人たち、端的に言えば敵だろうが、今ひとつ要領を得ない。

フィーナはもう一度ゆっくりと問いかけてみる。

「両方……というか、私自身が積み荷になるんです。私の持つ情報、荷物ですから。私は、どうしても『コロニー・グリトニム』に行かなければならないんです」

「グリトニムってえと……あの独立国が構築したコロニーのことだろう？　たしか、火星の近くにコロニーだったはずだ。」

奇妙な偶然もあったモノだ。今日、レムスとフィーナが居たグラム、

そこもコロニー・グリトニムからの高官が来るとかで、MSの行き来が規制されていたのだから。

レムスとフィーナは、そのことに気がつき、即座に脳チップのネット検索にて、グリトニムに関連する情報と、目の前の少女アリシアの顔写真を元に身元割り出しに掛かる。

この間、僅か数秒の早業だ。電脳化した人間にとっては、膨大な量の情報、データベースから必要なモノを探し当てるなど、その程度の時間しか要さない作業なのだ。

「（レムス。この子…）」

「（ああ、俺も今ビンゴさせたところだ。なるほどね……こいつは確かに、荒事になる可能性は大だな）」

フィーナがチップ経由での通信で話しかけてきたので、自分の考えが彼女と同じであることを伝える。

このアリシアという少女、ただの迷子ではないし、彼女がグリトニムに向かうことを望む理由もハッキリとした。

「（ボス、こいつを見てくれ）」

「（ん、何だこりゃ……？………ほお、なるほどな………）」

レムスは、調べた情報をヴァーリに脳チップ経由で送信した。彼も電脳化しており、このような情報交換はいつものことである。渡したのは、グリトニムについての情報、加えて、アリシアの素性であろう一枚の写真だった。

「（兎に角、この子の目的は大方理解できた。が、分かっているだろうか？ 俺たちは子供相手の慈善活動家じゃねえんだぞ？）」

「（当たり前だろう、これはビジネスだ。それに、スレイプニールのボスはアンタだ。仕事を受けるかどうかはアンタが決めてやってくれ。俺はそれに従うだけさ）」

「（ふん、良い答えだ……）」

レムスとヴァーリはそう短くやり取りを済ませると、通信を切った。そして、ヴァーリは再びアリシアの方に視線を向けて話を切り出す。

「よし、お前さんの望み、要求は理解した。アンタ自身をグリトニムまで連れて行く。周辺護衛を兼ねても、だ。そこに変更はないかい？」

「は、はい！！ 引き受けて下さるのですか？！」

「まあ、早まるな。話はここからなんだ。こっちも遊びでPMCやってる訳じゃねえからな。無論、報酬の話だよ。それに関連して、2、3条件を提示させていただきたい。それを呑んでもらえるのなら、俺たちは力を貸すことを約束しよう。」

少し興奮気味なアリシアを制しながら、ヴァーリはそう言う。

まあ、スレイプニールもPMCだ。当然、依頼を受けるのならそれに相当するだけの報酬を得なければならぬし、そうでないのなら、依頼は依頼ではなくなる。

PMCはボランティア団体ではない、あくまで一企業なのだから。

「報酬の方は……問題ないと思います。私をグリトニムにまで連

れて行ってもらえたならば分かることですが……………私は……………」

「グリトニム・独立国のトップ、アルベルト・G・テューラの一人娘、アリシア・G・テューラ……………だろ？」

ヴァーリは、彼女が名乗る前に牽制としてそう呟く。が、アリシアはあまり驚いた様子もなく、逆に少し困ったような顔で口を開く。

「あはは……。やはり、電腦化されている方からすれば、顔とグリトニムの事件の事を調べられちゃうと、すぐに分かっちゃいますよね……………」

「すまないな、勝手に調べてしまつて」

「いえ、どのみち話すつもりでしたし。それに、力を借りようという相手に対して、隠し事をしているこちらが悪いのですから」

恐らく、アリシア自身も電腦化しているのだろう。この短時間で自分の身元などが判明したことにはあまり驚くことはない。グリトニムは科学技術が発展した国だと聞くので、バイオチップについても、それなりのレベルには達しているのだろう。

勝手に身元を調べた事に対して、レムスがソファに座り直しながらそう言うのと、アリシアは首を横に振りながら返してきた。

「『グリトニムによる他コロニーへの侵略行為』、問題の原因はそこか？」

「世間ではそう噂されているみたいですね……。仰るとおり、私の持つ情報と私がグリトニムに帰らなければならぬ原因はそこにあ

ります。」

グリトニムによる、多国籍のコロニーへの侵略行為。この事件が表沙汰になったのは、つい三日前。グリトニム製のモビルスーツによって、連邦外の独立国のコロニーが一つ、占拠されてしまったのだ。

が、グリトニムの代表であるアルベルト・クラインはこの事件との関係などを一切否定した。他のコロニーへ侵略行為など、絶対にあり得ないとまで言っている。

しかし、アルベルト氏のその発言を嘲笑うかのように、またしても別のコロニーが襲撃され、多くの死者を出してしまったのだ。無論、実行したのはグリトニム製のモビルスーツだった。

周辺国からのパッシングなど、襲撃されたコロニーからの賠償請求が送られてくるのに、そうそう時間は掛からなかった。

アルベルト氏側、グリトニム政府は身に覚えのない事で非難される謂われもなければ、賠償に応じるつもりもないとして、強い意思表示を示している。

しかし、グリトニムのモビルスーツが事の発端であり、実行犯である事実は揺るがない。今現在、グリトニムは周辺コロニーから、かなり強い警戒を受けている。貿易などにも影響が出ると予想され、物資・食料などの不足も懸念されるところだ。

「そもそも、グリトニムのお姫様なあなたが、どうして地球に？」

「あ、私は地球の学校に留学をしております。数年前からずっと地球で暮らしているんです」

「ああ、なるほどね。ごめんなさい、話を進めてちょうだい」

話を一度折り、フィーナは謝るとアリシアに話の続きを促す。
アリシアは、再び表情を硬くして語り始める。

「私は、地球でその事件を知って。それで、地球にいるグリトニムの仕官の方々にお願いして、地球での情報収集をお願いしていました。遠く離れた火星での事件ですので、何も出てはこないだろうと思っただけです……」

「なるほどな。意外なところから、重要な関連情報が出てきたわけだ。」

ヴァーリの言葉に、アリシアは首を縦に振って頷いた。グリトニムのコロニー侵略。身に覚えの無いという政府、暗躍するモビルスーツ。

これらに関する何らかの情報を、アリシアや地球在住のグリトニム仕官達は掴んだのだ。

「本来なら、今日グリトニムから極秘で来られるはずだった使者の方に、この情報を渡せば良かったんですけど……連絡が付かない状態になってしまっただけ」

「となると、コロニー襲撃に関係している奴らの妨害にあっちゃまったってことだろうな。その使者ってのが、グラムのMSの立ち入り制限の原因って事か……なあるほど、見えてきたぜお嬢ちゃん」

アリシアの語る内容に、成程というような素振りを見せながらヴァーリが頷く。関係なさそうな事柄が、少しずつだが繋がってきている。

「そこで、私自らグリトニムに上がろうと、仕官さん達と一緒にグラムにある軌道エレベーターに向かったんです。しかし……………」

「またしても妨害に遭った……………。それで、仕官達に逃がされて、ウートガルズまで来たと……………」

「その通りです。それで、なんとかグリトニムまで辿り着くために、PMCの中でもヨーロッパ最強と謳われている皆さんに依頼を……………」

一通りの事情は聞いた。どうやら、今回の仕事は政治や謎の集団の陰が関係しているようである。

無論、スレイプニールは政治面から依頼を断るなどと言うことはしない。基本的には頼ってきた人間の依頼は、報酬さえあれば引き受ける。それが此処でのルールであり、基本スタンスなのだから。

「あいや、分かった。報酬の面では確かに問題なさそうだ。だが、こちらからの条件を呑んでもらわねえといけねえんだが、いいかい？」

「えと……………条件というのは……………」

ヴァーリは報酬面では問題ないと判断した。まあ、グリトニムという国のトップの娘を運ぶのだ、国が転覆でもしない限りは食いつぶぐれることはないだろう。

幸いなことに、グリトニム周辺コロニーは、警戒レベルを高めているだけで、今すぐに戦争云々を仕掛ける気配はない。のんびりし過ぎなければ、時間的な制約もほぼ無い。

「まず、最初に中東の紛争をクリアするまで待つて欲しい。という

か、今現在、中東紛争で戦っている仲間を拾った上で宇宙に上がりたいと思っている。部隊の8割を向こうに割いている状態だからな。」

「はい、それは問題ありません。中東紛争も、終結間近と聞いておりますし、皆さんのお仕事にも順番というモノがあるのは理解しているつもりです。割り込みをするつもりはありません」

戦力的な事を考えた上でのヴァーリの条件に、アリシアはしっかりと頷いて承諾してくれた。この年で、良くできた子だと、ヴァーリは感心してしまった。

彼女の言うとおり、仕事の順番から言えば中東紛争の介入の方が先に入っている仕事なのだから、そちらを優先するのが筋というモノだろう。

途中で依頼をキャンセルなどしようものなら、スレイプニールは業界内での信用を失ってしまうのだから。

「よし、なら二つ目だ。まあ、これは条件と言うよりも提案なんだから。中東で仲間を拾った後、グラムの軌道エレベーターには向かわずに、北アメリカ大陸の方の軌道エレベーターを使って宇宙に上がろうと思うんだが」

「えっと……それは、私たちを襲った人達の妨害を考慮して、と言うことでしょうか？」

「ああ。さっき聞いた様子じゃ、その連中はまだグラムにいて見て間違いないだろうしな。ちよいと遠回りになるが、万が一を考えれば、そっちの方が近道だし、安全だ」

二つ目の条件は、宇宙への上がり方だった。軌道エレベーターの乗り口は各地に点在しており、ウートガルズからもっとも近くにあるのがグラムのモノである。

本当ならば、一刻も早く宇宙に上がりたいところではあるが、グラムでの襲撃を考えれば遠回りこそが近道だと言うことだろう。

「そうですね……。分かりました、そのルートでお願いします。私は、戦闘方面では素人なので、そちらは皆さんに一任させていただきます」

「おお、任せてくれ。よし、っていうことで交渉成立だ。」

アリシアとヴァーリは交渉成立と言うことで、握手を交わす。詳しい書類などは後で書く必要はあるが、今はこれで十分だろう。

「あ、後な、情報の内容については口にしちゃあいけねえよ？　どこで誰が聞いているか分かったもんじゃねえからな。念のために、俺たちも情報の中身は知らないままで居る事しておく」

「は、はい！！　気をつけます。」

交渉がうまく行ったことにホッとしたようで、アリシアはどこか安堵した様子で、ココアの残りを飲み干した。

問題はまだまだ残っている。コロニー襲撃の犯人と、アリシア達を襲った敵の事や、火星付近のコロニー帯の情勢など、不確定要素は多い。

「安心しな、うちの奴らは手練れ揃いだ。万一、敵さんから襲撃されたとしても、心配はいらねえよ。そのレムスなんぞ、モビルスーツ乗って、デブリ帯の中でフルスロットルかますような奴だから

な」

「れ、レムスさん……すごいんですね……。ていうか、何故デブリの中を全開で……？」

「敵を挟み込むのに、時間の短縮の為に、らしいわよ？ 馬鹿な真似しないでって言っても、ちっとも聞いてくれないのよこの人」

「……………」

まあ、それでもこちらも素人集団ではない。スレイプニールの名前は伊達ではない。

レムスにしても、ヴァーリやフィーナが言うように、デブリ帯をフルスロットルで突っ切るなどと言う馬鹿げた事をやってのけるような連中が集まったPMCなのだ。

不確定要素に対応するだけの力はあると思って良いだろう。

「そうと決まれば、準備を急がねえとな。レムス、お前はこの子を連れて、一旦家に帰って休め。俺は『リンドブルム』の手配をしておく。」

リンドブルムというのは、スレイプニールの持つ移動用兼、強襲機動艦である。複数のモビルスーツを運用することが可能であり、宇宙での航行も可能という高性能な母艦である。スレイプニールの旗艦と言っても良いだろう。

「って、俺の家かよ……。まあ、仕方ないか……………」

「す、すみません。お世話になります……………」

「いいのよ。ウチは広いから、部屋だって結構空いてるしね」

何故か、同居人であるフィーナがアリシアにそう言う。まあ、もうツッコミ気もないのだが。

何だかんだで、レムスの家は広い。子供一人が増えたくらいでは、あまり変わりはないだろう。

「出発は明後日だ。明日は長旅の準備に精を出すこった。ついでにレムス達に街を案内してもらえばいい」

「は、はい。お二人とも、よろしくお願いします!!」

アリシアが、深くお辞儀してお願いしてきたので、これでは断るに断れない。

まあ、明日がオフになるというのだから、レムスとしては断る理由もないのだが。

「ええ、任せておきなさい。買い物費用は全部レムス持ちだから、思う存分買い物を楽しむと良いわ」

「おい……。俺を破産させる気か……………」

「あ、あはは……………」

恐らく、明日はフィーナの買い物メインになってしまいうだろうと思いつつ、レムスに出来るのは財布へのダメージを心配することだけだった。

アリシアは、そんな二人を見ながら、苦笑いを浮かべていた。

「心配しなくても良いのよレムス？　ちゃんとあなた好みのスケスケ下着を買う予定だから。そっち方面の心配は要らないわ」

「お前の下着なんぞに興味はない」

「あら……レムスは下着なんかどうでも良いと？　見えるか見えないかのスカートの中に広がる理想郷アウアロンなど要らぬと言いたいのかしら？」

レムスの言葉に、フィーナは信じられないという顔でそう言ってくる。表現の仕方が大げさなのは、この女のデフォである。

「お前は俺に何を期待しているのかは知らんが……。布きれ如きにムキになるな………」

「なるほど、いいわ。レムスがそのつもりなら、今日から穿かないことにするから。ノーパン主義のレムスに合わせて、恥ずかしさを我慢してでも男の趣味に合わせようとする健気な女、それが私よ………」

「おい、いつから俺はノーパン主義者になったんだ？　ていうか、興味ないだけなんだから、最低限の人間文化だけは保ってくれ。」

「レムス、知ってしまっているかしら？　太古の昔には下着なんて存在していなかったと言うこと………」

「おーい、誰か救急車呼んでくれ。可哀想な子が居る、主に頭の中の意味で」

こうなってはフィーナの萌え理論攻撃は止まらない。いつものことなのだが、普通の女の子というのは、こういった話を嫌がるものなのではないだろうか？

そんな一般的な女の定義を改めて思考しながら、レムスはフィーナの萌え理論を聞き流していた。

「良いのかしら、レムス？ 今日からあなたの日課であった、私の下着を被って『ハアハア……た、堪らん』するという行為が出来なくなってしまうのよ？ あなたの精神が何日持ちこたえられるか見物ね」

「人を勝手に犯罪者にするな！ 俺にそんな趣味はない！！」

勝手に作られたレムスに性癖情報については、力の限りの否定をせざるを得なかったが。

「あの………いつもこんな感じなんですか？」

「まあ、その………なんだ………。お前さんも直に慣れるさ」

「は、はあ………」

ギャーギャー騒いでいるレムスとフィーナを見ながら、ヴァーリの言葉に、出来ればあまり慣れたくないと、心の中で呟きとなったアリシアであった………。

Act. 4 コロニー・グリトニム（後書き）

フィーナ「まったく、レムスったら、毎晩毎晩私の下着でハアハアしているなんて……………（想像中）……………ちよつと可愛いじゃない」

レムス「いやだからしてないと言っているだろうに……………」

F20C「まったく、これだから男って奴は……………」

レムス「なるほど、ならお前の股の下の大和は叩き斬っても良いというわけだな」

F20C「それだけは勘弁して下さい」

次回、Act. 5『間違った善意と地獄への道』

Act. 5 間違った善意と地獄への道（前書き）

というわけで、Act5でございます。今回は、レムスさんの暗い部分が少し垣間見える……かも？

アリシアとの語らいや、フィーナの焼き餅なんかも……

戦闘が少なくてごめんなさい。とはいえ、私の文章力で戦闘に期待されてる方が居てくれるのかは分かりませんがww

どちらかというと、私のガンダム小説は人間ドラマとか、哲学の概念が主になりそうです。

と、そんな感じで本編をどうぞ

あ、今回からOPとEDを設定いたしましたw

OPテーマ

『Red Fracti on』 song by MEL
アニメ『Black Lagoon』より

この歌は歌詞がカッコよすぎますね、特に和訳したら。

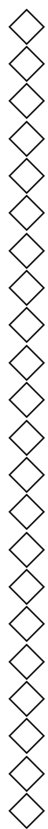
この作品は基本的にドンパチを含みますので、このテーマソングに設定させていただきました。

Act. 5 間違った善意と地獄への道

The road to hell is paved with good intentions.

地獄への道は善意で敷き詰められている。

サミュエル・ジョンソン（イギリス）



『女の買い物は長い』

世間ではそれが通説となっているらしい。テレビでやっているドラマでも、アニメでも、ゲームの中でも小説の中でも。

デートに、またはフラグ構築中に発生したイベントにて買い物に付き合わされることがある。

そんなイベントが発生した際、必ずと言って良いほど、主人公は女の服選びに延々付き合わされたり、買う買わないかの二択に悩む女の決断を待ったりと。

兎に角、男は待たされるように出来ている。ある意味宿命が如く。

「いつまで待たせる積もりなんだ……フィーナの奴は………」

ウートガルズの中にある、商業エリア、さらにその中の服などを主に取り扱っている店が並んでいる区画のベンチにて、レムスは溜息混じりでそう呟く。

理由は至極シンプルなモノで、フィーナとアリシアの買い物及早5時間にも及んでいる事である。朝から家を出て、今現在2時過ぎ。女の買い物には時間が掛かると言っても、限度というモノがある。

先程までは、脳チップネットワークを使って、ニュースなどを見たりして時間を潰していたのだが、流石に延々とそれを続けていられるわけではない。

「だから二人で行けと言ったんだ俺は……………」

本当なら、アリシアの買い物はフィーナに任せておくつもりだった。男の自分が言ったところで、特に役に立つわけでもない。今の時代、買ったものは全てその日の内に家に届くシステムになっているので、荷物持ちという使い道も無い。

だから、今日は朝からfrisベルグのOSなどのチェックをしようと計画していたのだが、朝目が覚めて5秒でそのプランは見事に水泡に帰した。

別に死ぬほど嫌というわけではなかったが、今のようにな何時間も待ち惚けするハメになるくらいなら、全力で断っておいた方が良かったのかも知れない。

「あ、レムスのにーちゃんだ!!」

「ホントだ、帰ってきてたんだ!!」

「おい、レムス……!!!!」

と、その時だった。街中でボーツとしているレムスを見かけた子供が、彼の名前を呼びながらこちらにやって来た。

「おい、ガキ共。相変わらずおもちゃの銃で戦争ごっこか？」

「違がうよ!!! これは立派な訓練なんだよ!!!」

レムスは駆け寄ってくる子供に片手を上げて返事をしながら、からかい気味にそう言ってみる。

この子供達三人は、ウートガルズ在住の地元の子供達で、街の中をいつも縦横無尽に遊び回っている。元気が有り余っているというか、若さ故の行動力なのか、遊びの内容はかなりハードなモノが多いらしい。

「訓練ねえ………その銃（恐らく玩具）、セーフティ解除されていないから撃てないが、どんな訓練するつもりなんだ？」

「「「うえ!!!?」」」

レムスの指摘に、子供三人は同時に慌てた様子で、それぞれ手にしていたエアガンであろう、銃を見やる。

昨今のエアガンというのは良く出来ており、デザインへの拘りや重厚感はもちろん、安全性にも配慮が行き渡っている。

云百年前のモノであれば、BB弾なるモノがエアガンから、銃弾の代わりに発射されていたらしいが、今は違う。

最近のエアガンは、安全面に配慮した結果、BB弾ではなく空気の流れが放たれるようになっている。

マガジンの中には、圧縮した空気を込めた弾が入っており、それを発射するという感じらしい。まあ、空気と言っても塊が当たれば少しは痛い。怪我などの心配はほぼ無いと言っても良いが、空き缶を凹ませる事くらいは出来るだろう。

何にしても、人の急所には向けない方が賢明である。

「れ、レムス……………セーフティってどうやって外せばいいの？」

「お、俺も分かんない……………」

「僕も……………」

「……………やれやれ、大した訓練生さんだ……………」

言いながら、レムスは順番にエアガンのセーフティを外していく。デザインや重厚感のリアルさだけではなく、セーフティロックの機構までを無駄にリアルに再現しているこのエアガン。

昨今、急激な成長を見せている玩具メーカーが作ったモノらしい。なんでも、会社のオーナーがかなりのガンマニアだそうで、自分の趣味全開で作ったモノがこうしてヒットしているらしい。なんというか、商売と自分の趣味が上手くマッチングした結果というのは、こういうのを言うのかも知れない。

「コルト・ガバメントにベレッタM76、M92か……………えらく大昔の銃なのに、形はあんまり変わらん、今の銃と……………」

「そう言えば、レムス兄ちゃんのと一緒だね、細かいところかは違うけど」

レムスの弦きに、子供の内の一人がそう言うてくる。視線はレムス

の腰にある銃に向けられている。

モビルスーツを動かすだけが、PMCではない。無論、自分の手で銃を握って引き金を引くことだっている。

「人を殺す道具ってのはな、いくら技術が変わっても、新しい素材を使っても、目的が同じだから、形はそうそう変わりやしないさ。銃で言えば、要するに弾を飛ばす為にはこの形が一番良いって事なんだろう」

レムスは言いながら、セーフティを外してやったベレッタM76を構えて、子供達が的として立てたであろう空き缶に狙いを定め……

パン、パン、パン、パン！！！！

「すっげえ………」

「相変わらず、射撃上手いんだ、レムス………」

続けざまに四発撃って、全ての空き缶を凹ませた上で、地面に落として見せた。

「今俺が持つてる銃でも、この銃でも、空き缶は撃ち落とせる。まあ、実際に人に当たっちゃえばそうも言えないが、要するにこう言う事だ。弾を放って、標的に命中させる。銃の役割なんて、それだけしかない。これはそういう道具だからな。だから、形も似たり寄ったりになるんだよ」

レムスは、昔を思い出しながらそう独り言のように呟いた。毎日が生きるか死ぬかの綱渡りだったあの頃。銃だけが、自分の身

を守るための道具だった頃。

生きるためには何でもしていた頃。

ただ、弾を発射して、標的に命中させるだけの道具に、散々助けられてきた事を、思い出していた。

「じゃあさ、じゃあさ。それって、モビルスーツも同じって事？」

「モビルスーツも……まあ、同じだろうな。工業用だろうが、戦闘用だろうが、人を殺せるだけの力を秘めてるからな。でもな、銃にしてもMSにしても、最終的には使い手次第って事なんだよ」

「使い手次第……かあ………」

「なんか難しいね………」

レムスの言葉に、子供達はそう言う。

こんな年頃の子供にする話なのか、今になって若干の戸惑いを感じてしまうレムスだが、まあ、後学の一端にでもなればいいと思って蒸し返すことはしなかった。

「だからお前らも、エアガンだからって、アホみたいに撃ちまくるんじゃないぞ。撃つなら、スマートに、自分のルールの中で撃て」

「自分のルールって？ 僕のルールってどんなの？」

「そいつは人それぞれだからな。俺のルールとお前のルールは別モンだ。お前自身が見つけるこった」

レムスはそう言いながら、エアガンを返す。

自分のルールの中で銃を撃つ。レムスの中のルールは………

「（俺のルールか……………昔なら闇雲に撃ちまくってたけど……………今は少し……………違う気がする）」

そこで頭の中に出てきたフィーナや、スレイプニールの面々の顔を振り払い、レムスは少し上ずった声で子供達に言う。

「ほれ、エアガンで遊ぶなら、人気のないところにしとけよ。誰かに当たったら危ないからな」

「「はーい!!」「」」

「返事だけは一人前な訓練生だよ、ホントに……………」

子供達が走り去るのを見ながら、レムスは少し笑いながらそう呟いた。

その数分後、大量の買い物をしてきたであろうフィーナとアリシアと合流し、レムス達は帰宅することにしたのであった……………



「えと……………これがスラスター方向制御のフットペダルで……………これが……………」

「スラスターの勢いっていうか、ドライブをどんだけブン回すかの制御レバーだな。車で言えばアクセルに近い」

「へえ…………グリトニムのモビルスーツとは少し違いますけど、基本コンセプトは同じなんですね。姿勢制御モジュールにも、共通する部分がありましたし」

「へえ、流石は技術大国のお嬢さんだ。MS工学にも詳しいんだな」
レムスとアリシアは、一度帰宅した後にスレイプニールのMSハンガーに来ていた。
リンドブルムの様子を見ると、アリシアがガンダムを見てみたいと言ってきたからだ。

フィーナもフリスベルグの調整をしたかったとかで、今はメカと睨めっこしている。

アリシアをフリスベルグのコクピットに乘せてやり、簡単に機器の説明をしてやっただけなのだが、技術革新の進んでいる国のお嬢さんだけあってか、理解が早く、専門知識も中々に豊富である。

「武装は、ビームサーベルが二本、ビームライフルが二丁、頭部のバルカン砲……………すこし、火力が少ないようない……………？」

「……………まあ、それでもパワーは他の機体よりも段違いらしい。
他のガンダムや、モビルスーツに搭載されているアルタドライブと、こいつのザルヴァートドライブじゃ、5倍近いパワー差があるらしいからな」

火力不足の点をアリシアに指摘されたレムスは、話の矛先を別の方に向けて濁す。
火力がドライブの出力に対して、比例していないことはレムスも承

知の上なのだが……………」

「（こればかりは、俺自身の問題だな……………」

そう考えながら、レムスはフリスベルグの背中にある翼を模した機構を見つめていた。

「……………」？　レムスさん？」

「あ、ああ、すまない。少しボーツとしてしまったな。」

「い、いえ。もしかして、お疲れですか？」

反応がないレムスを心配してか、アリシアが少し心配そうに尋ねてきて、初めて呼ばれていることに気がついたレムス。

子供になにを心配を掛けているのかと思い、レムスは何でもないようにアリシアに返事をする。

「いや、そんなことはないさ。で、話の続きだが……………」

「は、はい、お願いします！」

レムスがそう言うと、アリシアはそれ以上の追求はしてこなかった。なかなか、空気の読める12歳らしい。

「フリスベルグは、どちらかと言えば機動性を重視した機体なんだ。大気圏内でも、MA並のスピードが出るぞ」

「ということは、宇宙空間ではもっと早いんですか？」

「まあ、単純に考えればそうだな。デブリとかが多いが、避けて進めばいい話だ」

事もなさに言うレムスだが、それがどれだけ難しいことなのかは、アリシアにも分かってしまう。デブリの中というのは、高い空間認識能力や、情報処理能力が求められる。

その中を、MSで、しかもフルスロットルで全開をかますという行為は、一般的には自殺志願者のすることである。

「レムスさん……あんまり危ないことはしない方が良いでしょう？
フィーナさんも心配されてました。」

「むう……あのスリルが分からんとは………」

「どんなスリルですか………」

レムスの命知らずなモビルスーツの操縦技術に、アリシアは若干の呆れと共に、苦笑いを浮かべるばかりだった。

「でも、やっぱりガンダムって高性能機の代名詞みたいですよね。」

「らしいな。ボス曰く、そんなつもりはこれっぽっちもないらしいが、俺から見てもそう思うよ。」

話の方向を少し変えたアリシアに、レムスも同意見だと頷きながら答える。

確かに、ガンダムタイプと言えば、歴史上でも高性能機の代名詞のようなモノで、戦場では恐れられると同時に、ちょっとした英雄的な機体でもある。

「えっと…………たしか、連邦が初めて製造したMSの名前が【ガンダム】なんでしたっけ？」

「ああ、ジオン公国だっけか？　そこからは白い悪魔とか言われてたらしいな。」

「ニュータイプの、アムロ・レイが乗っていたと、歴史の教科書には載ってます。でも、第二次ネオ・ジオン戦争で行方不明になったとか……………」

話が歴史方面に入っていくと、必然的にこの話が持ち上がってくる。まあ、それだけインパクトの強い話だと言うことでもあろうが、レムスにとつてただの過去だった。

「赤い彗星、シャア・アズナブルも一緒にな。その後には、ラプラス戦争やらなんやらがあったらしいな。よくもまあ、飽きずに戦争ばっかやるモンだと思うよ」

「でも、それ以上に悲しいですよ……………人が大勢死んじゃうのは……………」

アリシアは、少し俯き気味になってそう呟く。彼女のツートールに纏めた髪が、それと同時にシヨンボリという気持ちを体现するかのよう揺れる。

レムスは思った、まず最初にそう言う気持ちが出てくるアリシアはとても優しいのだ、と。

「まあ、そうかもな……………。でも、その戦争で金儲けしてる奴が

居るのも確かだ。戦争がないと、金儲けできない奴がいる。人を殺して、金をもらってる連中が今の世の中にも居る。俺らも、それらの一部さ」

だが、世界は優しさだけで作られているわけではない。憎しみや、嫉妬、悲しみもまた、世界を構成するモノの一部だ。

綺麗なもので世界を作ることとは出来ない。人が見たがらないような醜いモノがなければ、綺麗なものは存在し得ない。

「そ、そんなこと……レムスさんも、フィーナさんも、ボスさんも、とっても良い人で………」

「アリシア、これも現実だ。お前の優しさは、確かに素晴らしい。戦争という単語に対して、人が死ぬことを一番に考え付いたお前の優しさは、本物だと俺は思う。でもな、現実から目を背けた、間違った優しさや善意ほど、危ういものはないんだよ。」

厳しいことを言うかも知れないが、アリシアには本当の意味で優しい人間として生きて欲しい。レムスは、普段の自分からは考えられないようなお節介をしていると自覚しつつも続ける。

「『地獄への道は、善意で敷き詰められている』。そんな言葉もあるくらいなんだ。物事を一面からしか見てない人間の間違った優しさや善意ってのは、目に見える、分かりやすい悪意よりも質が悪いってことを覚えておいた方が良い。」

「……………」

優しさというモノは一見すると美しい、しかし、それと同時に優しさという殻の中に本人ですら意識していない無自覚な悪意が隠れて

いる。

それは、ハッキリとした悪意などよりも遙かに厄介なモノだ。

アリシアは、レムスの言葉に何かを思案するように目を閉じる。まるで、レムスの言葉をゆっくりと租借して、理解するかのよう。

「はい、レムさんの言うとおりだと思います……でも………」

「?」

アリシアは、一旦言葉を切ってから、もう一度レムスの目を見てハッキリと言ってきた。

「レムスさんやフィーナさん達は、とっても良い人達だって事だけは、覆しませんから。これは、レムスさん達のお仕事理解した上で出した私の結論です」

「……………」

女というのは、どうしても強いのか。レムスは、そう思いながらアリシアの力強い言葉と視線を受け止めながらそう思った。

そして、レムスは徐ろにアリシアの頭に手を乗せて、ワシヤワシヤと撫でながら言う。

「にゃ?! レムスさん、にゃにするんですか!!」

「いや、何となくだ。……………アリシア、お前は良い女になるよ」

「い、良い女って……………そんな……………ふにゅう……………」
／／／／

撫でられたのが気持ちよかったのか、アリシアは子猫のようなりアクシヨンを取る。猫属性とは、こう言う事なのかとレムスは下らないことを考えていた。

そんな彼に……………

ゴスン！！

「……………（ダラダラ）」↑流血

「あ、ゴメーン。手が滑っちゃったわ」

レムスの頭に、レンチがクリーンヒットしていた。

下の方から、棒読みの謝罪をしてくるフィーナの姿が見える。心なしか、若干怒っているようにも見えなくはない。

「あ、あの……………レムスさん？ 血が出てますけど、大丈夫ですか？」

「アリシアが三人に見える」

「結構重傷！！？」

どうやら、フィーナのレンチアタックはかなりの威力を秘めていたらしい。さしものレムスも、この攻撃のまえには撃沈させられてしまう。

「フィーナ、成る程…………お前は俺を殺す気なんだな？ でないとレンチをオーバースローで上に向かって投げる為の理由が考えられん。」

「あらやだ、心外だわ。あなたがロリコンに目覚めるのを阻止してあげたのに。感謝こそされど、文句を言われる謂われはないわね」

「誰がロリコンだ……………」

「そうです！！私はもう12歳です！！ ロリじゃありません！！」

世間ではそれをロリ、若しくは少女という。

「お黙りなさい、金髪少女アリシア。私としたことが盲点だったわ……………。アリシアとて歴とした雌猫……………。彼女の萌えポイント、私のミニスカメイド（ガーターベルト装着）に匹敵するモノだったなんて……………」

「少女じゃありません！！ あと二、三年したらビックリするくらいのナイスバディになる予定なんです！！ そしたら、フィーナさんなんて目じゃありませんから！！」

「私よりもナイスバディに？ 笑止、私があなたぐらいの年には、すでにあなたの倍くらいに成長していたわ。諦めなさい、あなたはロリ猫属性を永遠に背負う運命にあるのよ！！」

MSハンガーにて、頭から大量出血したレムスと、限りなく不毛な

争いを繰り広げているフィーナとアリシアという、わけの分からな
い光景が広がっていた。

「というより、胸なんかただの脂肪の塊じゃないですか!!! あ
っても肩が凝ったり、何かと邪魔になるって聞きます!!!」

「これだからお子ちゃまは……。大きいからこそ出来る事だ
つてあるのよ。主に、夜のご奉仕的な意味で」

「ご、ご奉仕!!!? // // // // //」

下ネタに走り始めるフィーナに、今までその手の話題に触れてこな
かったのか、真っ赤になりながらも興味津々になるアリシア。

ちなみに断っておくが、フィーナがレムスにいかかわしい行為をし
たという事実はない、と言うことだけは、レムスの名誉のためにも
記しておくことにする。

「はあ……。永遠に遊んでろ……。アホ共め……。」

レムスは溜息を吐きながら、セルフサービスで包帯を頭に巻きなが
ら、止血に勤しんでいたのだった……。

Act. 5 間違った善意と地獄への道（後書き）

F20C 「フィーナさん、焼き餅ですか？」

フィーナ 「あら？ そう見えてしまったかしら？」

F20C 「ええまあ……。ていうか、流石にレンチは不味いですよ、下手すりゃ死にます」

フィーナ 「大丈夫よ、あの人石頭だから」

F20C 「ぼっちり流血されましたってwwさてさて、前半に出てきた銃の種類ですが、ハッキリ言います。作者は銃の知識なんて全く無いです。知ってるのがあの三種類だけなんですよね」

フィーナ 「ラノベとかからの知識がほとんどじゃない？」

F20C 「それは否めないかも……。今回は中東紛争への介入です。新しいガンダムも出てきますので、お楽しみに」

EDテーマ『Drastic my soul』
アニメ『スクライド』EDより

バルディッシュさん、アイデア採用させていただきました！

Act. 6 『中東紛争』

A c t. 6 中東紛争（前書き）

というわけで A c t 6 でございます。

今回は戦闘までの導入と言ったところでしょうか。フリスベルグの特性の一つが明らかになります。

まあ、そこまで大袈裟なモノではありませんけど W

あとは、二機目のガンダムとそのパイロットさんも出てきますので、お楽しみに。

ではでは、本編をどうぞ！

Act. 6 中東紛争

狙撃手というモノは、基本的に遠距離からの一撃必殺が基本である。初撃はターゲットに悟られることなく攻撃できる最大のチャンスでもある。

しかし、外してしまえば射線軸からこちらの位置が割り出されてしまい、二撃目を決めることが難しい。

まあ、これは基本的にターゲットが一人の場合に適応されることなのだが、MS戦では集団相手にでも通じることはある。

ファーストアタックでどれだけ敵を沈められるかと言うことだ。

そして、スレイプニールの砲狙撃戦特化型ガンダム、【ヘーニルガンダム】のパイロットであるジグ・スタングウェイもまた、そのセオリーに従ってヘーニルのロングレンジライフルのトリガーを引いた。

敵の数は5体。旧型ではあるが、中東紛争にて最も広く運用されているであろうモビルスーツ、【ドラウグ】。四角い、角張った印象を与えるフォルムに、ヘッドに光る一つ目のカメラアイが特徴的なMSで、砂漠での運用に特化している機体でもある。

ジグが発射したロングレンジライフルのビームは3発。初撃での3体撃破が、ジグが自身に課したノルマだ。

敵の移動コース、パイロットの視界域、弾丸と敵機の相対移動速度、加えてジグの長年の戦いの経験から培われた感覚。それらが全て揃

った条件であれば、必然的に狙撃は成功する。

ドオン、ドオン、ドオン！！

「はっ、ビンゴだぜ♪」

ビーム3発は、吸い込まれるようにドラウグに命中し、敵機を爆散させる。残された二体は、射線軸上からの計算で、ジグとヘーニルガンダムの位置を割り出しているだろう。
だからこそ……………

「さて、隠密射撃はここまでだ。こっからが本当の腕の見せ所ってやつだ」

ジグはそう呟くと、ヘーニルのスラスターを吹かせて空中に上がり、同時にロングレンジライフルを構える。

残りの二体は、動揺が消えない間に消してしまえた方が良い。位置が特定されるのだから、隠れているメリットもないので、彼は空中からの砲狙撃戦に切り替えた。

「圧倒させてもらうぜ！！！」

ジグがそう叫ぶと共に、ヘーニルのロングレンジライフルに加え、腰、肩などに装備されているミサイルポッドが一斉に火を噴く。

先程の二体の敵機以外にも、すぐそこに一個小隊分の敵が集結しつつあったので、そちらの方も攻撃することを見越しての攻勢への転換だった。

「が、ガンダムか！！？」

「なんという火りよk……」

ドラウグに搭乗していたパイロットたちは、セリフを言いきる前に被弾し、そのまま機体と一緒に爆散する。そう、これがモビルスーツ戦での死。一瞬のうちに襲い掛かってくる死というモノだ。

ジグが放った砲撃の嵐は、一個小隊を軽々と、しかも一発も外すことなく撃ち抜き、瓦礫の山に変化させてしまった。

「さて、これで俺のノルマは終了だ。あとはベル君に任せるとしますかね……って、おやおやあ？」

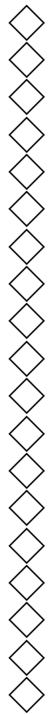
ジグが戦闘を終えたとは思えないようなのんびりとした事を言っている最中。彼の視界に思いもしないものが飛び込んできた。

1つは、メインカラーに黒を配した強襲揚陸艦、二つ目はその強襲艦から飛び出してきた一機のモビルスーツだった。

青と白をメインカラーにし、背中の翼を模した機構が特徴的なモビルスーツだ。そして、ジグの駆るヘーニルと同じ、ガンダムタイプモビルスーツである。

「あいつめえ、やっと来やがったかあ。つたく、もうすぐパーティーは終わっちまうぜ、レムス君よお」

そう、そのモビルスーツ、ガンダム・フリスベルグのパイロットは、ジグの所属するPMC・スレイプニールのエース級パイロットであり、彼の友人でもある存在、レムス・ヴィーランドその人だったのだ。



レムスがフリスベルグで発進する少し前、スレイプニールの強襲特装艦リンドブルム内の、MSハンガーにて……………

「で、残すところの残存戦力は、ポイントα12にある前哨基地だ
けってことでいいのか、ボス？」

『ああ、そこを根城にしてる反政府組織のリーダーの……ブエルつてやつを討ち取れば、この紛争もゲームセットってわけだ。だが、
気をつけろよ？ ブエルの駆る黒いドラウグは中々に手強いっても
っぱらの噂だ』

「ああ、分かってるさ。ブエルだかパウエルだか知らんが、黒いドラウグをスクラップにすればいいだけだろ？ ガキでもできる簡単な
お使い仕事だ」

『はっ、その小生意気な口が利けるうちは心配いらねえな。フリス
ベルグ出撃ポイントまであと五分だ、しっかりな』

「ヤー（了解）」

フリスベルグのコクピットの中で、白と青をメインカラーにしたパイロットスーツに身を包んだレムスは、脳チップを経由して視覚野に
直接映し出された映像の中のヴァーリとこれからの戦闘の目標に
ついて話を付けた。

中東紛争の事の発端は、単純に言えば、中東地域一部の過激派集団
の現政府への不満が爆発したことにあった。

内容としてみれば、エネルギー供給の問題だったり、雇用の問題、賃金、社会保障の不備など……

例を挙げるとキリがないというのが実際である。

そもそも、中東はたびたび紛争が起きる非常に不安定な土地であり、紛争が終結するたびに政権が代わり、その後にもまた紛争が起これというイタチごっこの無限ループ状態が実情なのだ。

十数年前までは、中東もそれなりに平和な地域として発展していたのだが、些細な財政問題から、一気に財政難に陥り、ここまで不安定になってしまいうなど、誰も予想できなかったことであろう。

大昔は、石油などのエネルギー資源などで絶大な資源国として存在感を保っていた国も、今では見る影もない。エネルギー革新が進むという事は、古いエネルギーの需要が下がることを意味するのだ。

「てことらしい。黒いドラウグの解体作業になりそうだ」

「ドラウグっていうと、あの角ばった、芸術性の欠片も感じられないダサイモビルスーツの事よね？」

「ふい、フィーナさん……注目するところはそこではないと思います……」

レムスは、コクピットの外に居るフィーナとアリシアにそう言いながら、フリスベルグの各部パラメーターをチェックする。

この作業もまた、脳チップを通して機体とクロッシングしている状態なので、コンソールなどはレムスの視覚野に直接表示される。

フィーナの厳しいモビルスーツデザインチェックに、アリシアはや

れやれと言った様子を浮かべながら、苦笑いをするしかない。

「敵の前哨基地の火器を潰す為に、フリスベルグが発進した後、リンドブルムからミサイルでの艦砲射撃を行う。向こうさんも、モビルスーツを出してすぐにミサイルを撃つなんて考えてないだろうかな、対応が遅れてる間にドカンだ。ほんとなら、メガ粒子砲でもぶっ放したいとこだが、環境汚染の点でクライアントから使用禁止にされてるからな」

「で、でも、それって後ろからレムスさんに向かってミサイルが飛んでくるってことですよ？ 危なくないですか？」

確かに、モビルスーツを囫にして艦砲射撃を行えば、敵の裏を掛けるかもしれない。しかし、アリシアの言う通り、それは大きな危険を伴っている。一つ間違えば、フレンドリーファイアでフリスベルグが木端微塵になってしまうだろう。

「大丈夫だって。要するに当たらなきゃいいんだよ。全部避けちまえばオールオッケーだ。それに、フリスベルグの隠し玉その？もあるしな」

「隠し玉って……でも、それにしあってミサイルの雨の中を飛ぶなんて……」

レムスは事も無さげにそう言うが、背後から飛んでくる大量のミサイルを、敵基地に向かって高速で移動しながら回避するなど至難の業だ。

「大丈夫よアリシア。この人のモビルスーツのパイロットとしての腕『だけ』は信用できるから。それに、フリスベルグの性能は折り

紙つきよ？」

「だけってお前……。」

「あら？　でも事実じゃない？」

「お、お二人とも……。」

だが、フィーナがそう口を挟んでくると、緊張もへったくれもあつたものではない。レムスはいつものようにフィーナに、フィーナもいつものようにレムスに接している。

2人にとっては、これは当たり前なのだ。だからこそ、変に緊張したり、力んだりしないで済む。

2人のこのやり取りには、それだけの意味が含まれているという事だ。

アリシアは、そんな二人を見て、少しだけ羨ましいと思ってしまうた。

「じゃ、私とアリシアはブリッジで見物させてもらうわ。精々、砂漠のど真ん中に落っこちないようにしなさいね」

「うるせー。誰に向かって言っただお前は」

「スレイプニールのエースさんによ。ニュータイプなパイロットさん」

「だから何でも言ってるだろ、俺はニュータイプじゃ……ああもういい、さっさと行っちゃまえ、ゴーイングマイウェイ女」

「ええ、それじゃあね」

2人がそう言葉を交わすと、フリスベルグのハッチが閉められた。同時に、MSハンガー内の連絡用スピーカーから、音声が流れる。

『間もなく、フリスベルグ発進ポイントです。MSハンガーに留まっている方は、今すぐに退避してください』

「さ、行くわよ、アリシア」

「は、はい！」

アリシアとフィーナは、ハンガーのエレベーターに乗り、ブリッジに向かう。そして、リンドブルムのMSカタパルトのハッチがゆっくりと開いていく。

その様子を、レムスはフリスベルグのコクピット内で深呼吸をしながら眺めていた。

「よし……ジグとベルは生きてるな……。それと……少し大きすぎる敵意がある……。これがブエルって奴か……。？」

戦地の今現在の状況は、脳チップ経由で次々と更新されていくが、レムスはそれ以外の何かで敵の存在を感じていた。

レムス自身、この感覚はあまり好きではない。自分が誰なのか、時々分からなくなりそうだからだ。

「（戦場の匂いだ……）」

ハッチが開くと同時に見えてくる一面に広がる砂漠。どこか恐怖すら感じてしまいそうになる、果ての见えない砂の世界。だが、今からここがレムスの戦場、彼の生きる場所となる。

与えられたミッションはいつもの如く困難なものだが、不満はない。彼は恐怖よりも、死の一手手前に近づく感覚を味わい、脳内ではアドレナリンが全開で放出されている。

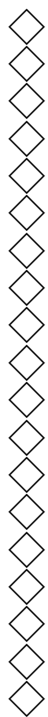
『レムス、手筈通りに頼むぜ。当たるんじゃないぞ?』

「ヤー。レムス・ヴィーランド、フリスベルグ、出るぞ」

ブリッジからのヴァーリの声に返事を返し、コントロールを回された発進タイミングに、名前と機体名を答えながらレムスはフリスベルグの出力アクセルレバーを押し出すように操作した。

そして、リンドブルムから青と白の二色、翼のような機構が特徴的なモビルスーツ、ガンダム・フリスベルグが発進し、空中で翼を広げ大きく飛翔した。

レムス「さあ、オープンコンバット（戦闘開始）だ」



——中東・反政府レジスタンス前哨基地内部——

「ぶ、ブエル大佐!!! スレイプニールのガンダムタイプによって、我が方の戦力は既に6割を消失!!! 残存戦力は、この前哨基地のみ!!!」

「ちい……。政府のクソツタレ共……。厄介な奴らを雇いおって……」

ブエル・オルファーンは、元を辿れば中東の紛争前に存在した共和国の軍隊、その軍の大佐だった男である。

元より、軍人家系だった彼は、先人たちがそうしたように迷うことなく軍属となり、着々と戦果を挙げて大佐、人を率いる立場の人間になった。

自分の能力を驕るわけでもない、周囲の人間が暗愚だったわけでもない。

彼は、結果が伴うだけの努力を重ねた、ただそれだけの事だった。故に、彼の人生には天才という単語はない。

天才と凡才の違いを究極的に分つとするならば、それは単に呑み込みの速さに他ならないというのが、彼の自論だからだ。

「大佐！！　ここは、一旦基地を放棄し、機会を窺うべきかと！！」

「機会などない……。すでに我らの背後には大地がないのだ。ここは、何としてでも死守せねばならん！！」

政府の墮落しきった様子に憤りを感じ、反政府団体に組し、今こうして全滅の危機に瀕している今でも、彼の自論が傾くことはない。戦果を挙げている敵のガンダムパイロットは、天才でもなんでもない。ただ単に、モビルスーツの操縦の呑み込みが早いだけの存在、ただの戦闘単位なのだ。

だがしかし、今はその『呑み込みの速さ』がブエル達レジスタンスに牙を剥いている。

レジスタンスにも、ドラウグというモビルスーツはあるものの、パイロットの質、錬度が圧倒的に足りていない。

雑兵と言ってしまう言葉が過ぎるが、目の前の現実を見ると、そう言われても仕方のない惨状だった。

「た、大佐!!! ポイントα9に強襲艦です!!! あれは……スレイプニールの強襲特装艦、リンドブルムと思われます!!!」

「ええい、こんな時に!!! 金でしか動かん、チップパー集団共が!!!」

構成メンバーの9割が非脳チップ適合者である、この反政府レジスタンス。脳チップ適合者を優遇する雇用インフラが確立されたこともまた、政府の方針に異を唱える者達を生み出すきっかけとなったことは否めない。

ブエル本人もまた、非脳チップ適合者であるため、脳チップに適応し、ネット・モビルスーツにより適応した集団であるPMC、スレイプニールには良い感情を抱いていなかった。

何よりも、彼には信念があったのだ。墮落した国を変え、平和で平等な、努力した者が報われる、そんな世界こそがかく在るべきだと、故に自分たちは正義なのだと。

その信念があったからこそ、ここまで戦い抜いてきたのだ。

だが、PMCの、今敵となっている連中はどうか？

金さえもらえれば、どんなに汚いことをしている国、個人、集団にも力を貸す、そんな不義の塊のような連中を、ブエルが快く思うはずもない。根っからの軍人氣質な彼にとっては、大義の無い、ましてや金で動くような俗物の集団などに負けるつもりなど毛頭なかった。

た。

しかし、現実はどうだ？

圧倒的不利、残骸となった大量のモビルスーツ、満杯状態の医務室、地面に転がる同志たちの死体。

完全なる敗北である。

認めようが認めまいが、事実はどこにある。

世界は、起こっている事のみで存在している。目の前にある敗北もまた、世界で起こっている、世界の一部だ。覆すことなど出来はしない。

故に……

「私のドラウグを準備しろ。私自らが出る」

「はっ！！」

ブエルが取った行動は、戦い抜くことだった。

そして、彼の決断と同時にリンドブルムから一機のモビルスーツが発進する。青と白のカラーリングが目を引くガンダムタイプ・フリスベルグガンダムである。

「大佐！！ 敵艦、モビルスーツの発進と同時にミサイル攻撃を！！」

「なに！！？ 味方ごと吹き飛ばすつもりなのか、あのチップーどもは！！？」

部下からの報告に驚愕しながらも、メインモニターに映る映像を見る。確かに、ガンダムタイプの背後に位置している特装艦の砲門が開いているではないか。

「モビルスーツを迎撃に……!!」

「ダメです!! 間に合いません!! 部隊が四方に展開し過ぎていて……」

ブエルが指示を飛ばしている間に、リンドブルムから大量のミサイルの雨が発射された。射線上に、自軍のモビルスーツが居るにも拘らず。

「(く……隙を突かれた……。)」

苦虫を噛み潰した表情を浮かべながら、ブエルは映像に食いつくような視線を送りながら事の成り行きを見ているしかなかった。

そして、次の瞬間、彼の目に信じられない光景が飛び込んできた。

「た、大佐!! 敵モビルスーツ、変形しました!!」

「可変型モビルスーツか……それに加えて、あのミサイルの雨の中をああも容易く」

そう、フリスベルグは驚くべきことに戦闘機のような形に変形したのだ。加えて、速度を落とすことなく、背後からのミサイルの雨を最低限の動きで避けながら、こちらに向かってくるではないか。

ミサイルなど知ったことではないと言わんばかりのフリスベルグの動きに、その場にいた誰もが言葉を失っていた。

レムスの言っていた隠し玉というのは、つまりはこういう事だった。フリスベルグの特徴の一つ、ウェブライダーへの可変機構である。この機構によって、大気圏内においても、フリスベルグは絶対的な制空力と、機動力を誇っている。

「ば、化け物か奴は！！？ ええい！！！」

ブエルはそう吐き捨てると、急いで自分のモビルスーツであるドラウグが配備されているMSハンガーに向かう。

どういう神経、そしてモビルスーツ適性があるのかは知らないが、あんな化け物相手に並みの兵が勝てるはずがない。

ドオオオオオン！！！！

「くっ……」

彼が走り出した数秒後、リンドブルムから降り注いだミサイルの雨によって、基地の砲台・弾薬庫などが吹き飛んだのだろう。強い振動が彼を襲った。

しかし、ブエルは走る事をやめない。ここで諦めてしまえば、自分に付き従ってきた部下たち、命を散らしていった部下たちにどんな顔を晒せばいいのか分からなかった。

「（さっきのあのモビルスーツの動き……まるでニュータイプとでも言わんばかりのモノだったな……。ふん……。久しぶりに骨のありそうなやつが相手だな……）」

そして、責務を感じるのと同時に、今から会いまみえる敵との戦闘への期待が、彼の心を震わせた。

こういう時、やはり自分は生粋の武人なのだと思ってしまう。

「いいだろう……この私が直々に相手をしてやる……。この、私のドラウグでな」

そして、彼が辿り着いたモビルスーツハンガーに既に配備が終わっている黒いモビルスーツ、ドラウグを見上げながら、ブエルは猛禽類を思わせる鋭い眼光を光らせるのだった……

Act. 6 中東紛争（後書き）

F20C「変形した……………」

レムス「いやいや、お前が設定考えたんだろうが……………」

フィーナ「ちなみに、フリスベルグのウェブライダー形態は、ゼータガンダムに似てる感じね。翼の機構は畳み込んで、メインウイングになってるわ」

F20C「なるほど……………変形後の武装は？」

フィーナ「主に二丁のビームライフルね。まあ、高速飛行を主目に置いてるだけあって、大気圏内でも機動性は抜群よ？」

レムス「なんでお前が勝手に説明してるんだ……………」

次回、Act. 7『大義ある戦いと、大義なき戦い』

Act. 7 大義ある戦いと、大義なき戦い（前書き）

はい、どうも。新しく本棚を購入し、漫画やラノベの保有量を増やす事が出来たF20Cでございます。

これで気兼ねなく衝動買いが出来るってもんですねww

今回は戦闘回ですね。レムスさんと敵の大將ブエルとの一騎打ちでございます。

何だろう？大切な事を忘れているような……

まあ良いでしょう。ではでは、本編どうぞーw

Act. 7 大義ある戦いと、大義なき戦い

Be accompanied by justice for
e is powerless, and tyrannical
power to be accompanied by ju
stice.

正義は力を伴わねば無力であり、力は正義を伴わねば横暴となる。

ブレーズ・

パスカル（フランス）



リンドブルムからの発進、それによる加速からくるGはモビルスー
ツに乗り始めた頃は慣れないモノだった。

しかし、今となってはこの加速と体を襲うGがあるからこそ、自分
が今いる場所。戦場に、自分が居るのだという事を実感させてくれ
る。

『レムス、予定通り艦砲射撃を行うぞ。全弾避けてみせろよ?』

「ああ、思い切りやってくれ。射線上に俺はいないと考えてブチか
ましてくれれば良い」

『ふん……良い答えだ』

リンドブルムのブリッジに居るヴァーリからの通信にそう答え、レムスはフリスベルグのドライヴを吠えさせる。スラスターに送られるエネルギーが爆発的にアップし、フリスベルグは更なる加速を見せる。

同時に、背後からミサイルの発射音が聞こえた。数など知ったことではないが、ヴァーリの事だ、遠慮などゼロで雨のごときミサイルを降らせてくるだろう。

「(…………よし…………始めるぜ、相棒!!!!)」

意識を研ぎ澄ませ、相棒であるフリスベルグに心の中でそう呼びかけ、レムスは戦闘行動に入る。

フリスベルグの変形機構を作動させ、機体をモビルスーツからウェブライダーに変貌させる。そして、背後からくるであろうミサイルの動きを体全体で感じ取る。

目だけでも、勘だけでも、経験だけでもない。それら全てをひつくるめた何か。いや、もしかするともっと他の何かなのかもしれない。

だが、レムスの体は背後からのミサイルの軌道、速度、射線などをすべて理解した上で、フリスベルグを踊らせる。

「(行けるっ!!)」

そう確信した瞬間、視界の端から次々とミサイルが飛んでいく。レムスは最小限の動きのみで後続のミサイルを回避しながら、ドライヴからの動力を上昇させ、速度をさらに上げていく。

「(ヤバイ…………ゾクゾクしてくる…………)」

ミサイルの中、高速飛行を続けるフリスベルグの中で、レムスは少しだがテンションが上がってしまっていた。やはり、戦場はこうでなくてはならない。

一歩間違えば即死亡、このスリルがあるからこそモビルスーツに乗るのはやめられない。

まあ、レムスにとってこれはビジネスなので、そんな感情を表に出すようなド三流な真似はしないが。彼は、この道のプロでもあるのだから。

「ミサイル、全弾着弾を確認。これよりモビルスーツによる介入を開始する」

『了解した。だが、投降サインを出した者は殺すな、クライアントからの命令だ。それ以外は構うな、『殲滅』だ』

「ヤー（了解）」

レムスはミサイルの着弾を確認し、リンドブルムのブリッジに報告する。その通信に間髪入ることなくヴァーリが返事を返し、作戦が本格化する。

「さて、仕事だ仕事」

レムスは言いながら、フリスベルグをモビルスーツに再可変させ、手に持った二丁のビームライフルを唸らせた。

敵前哨基地の対空砲や、対艦ミサイルなどは、先ほどのリンドブルムからの攻撃ですべて吹き飛んでいるが、ドラウグや戦闘用武装へりなどと言った喪のは残っている。

レムスは先だって、まだパイロットが乗る前の機体を全壊させておこうと考えていたのだ。

ドオン！！！！ ドオン！！！！

フリスベルグのビームライフルから放たれるビームは、吸い込まれるように敵の機体に命中し、爆散する。

搭乗しようとしていたパイロットであろう、反乱分子の者達は、啞然とした様子でただ立ち尽くすのみだった。

『レムスの旦那！！！！　ここは俺たちに任せて本丸を叩いてください！！！！』

『反乱分子共のMS練度は酷いもんです。ここは俺達ギリング部隊で十分でさあ！！！！』

と、その時だった。フリスベルグの通信チャンネル、正確にはレムスの脳チップを通して聴覚に見方からの通信チャンネルが飛んできた。

見れば、北東の方角から、白と赤をメインカラーにしたモビルスーツ、汎用型ガンダムタイプ・ギリングが五機ほどスラスターを軽快に操りながら飛んできた。

先遣隊として、ジグやベルたちと中東紛争に参加していたスレイプニールのギリング部隊である。

「久しぶりだな、お前ら。相変わらず頼もしい奴らだよ」

『へへっ！ 旦那からみっちり鍛えられてますからね。この程度の戦闘は何てことはねえですよ！！』

『そう言う事です、レムスの旦那！ 旦那は、敵本陣の猿山の大將を討ち取っちまってください！！ さっさとこの紛争終わらせて、パーッと行きましようや♪』

ギリング部隊のMSパイロットたちの腕は確かである。何しろ、レムスはもちろんの事ジグといった、超一流のパイロットの指導を受けており、その全員が脳チップ適合者である。

MS操縦技術、MSとの相性、どれをとっても連合の一般パイロットよりも腕は上である。ろくな訓練も受けていない、反政府組織のMS乗りなどと比べること自体が間違っているだろう。

「よし、お前たちは周囲のドラウグを一掃しつつ、敵基地の火器を無力化させる。だが、投降の意思を示すものは殺すな、クライアントからの命令だ。俺は、敵の大將を狩りに行く」

ギリング部隊達『『合点承知！！！！』』

「お前らはいつの時代の東洋人だ……」

頼もしい？返事にレムスは苦笑しながらフリスベルグを飛翔させる。ギリング部隊が敵勢力の一掃を担ってくれるのなら、レムスの仕事は敵の大將、ブエルの駆る黒いドラウグの解体作業のみとなる。

レムスは頼れる仲間はこの場を任せ、一直線に敵本陣を目指すことにした。

「よし、ミサイル攻撃で火器は87%が壊滅状態……上出来だな」

先程のリンドブルムからの艦砲射撃によって、敵基地の銃火器はほぼ壊滅状態である。ここから基地を制圧することなど、フリスベルグの火力でも可能だ。

しかし、物事は常に思い通りにはならないモノだ。今回の紛争も、根っこの部分は自分たちにとって都合が悪い、思い通りにいかないことがフラストレーションとなり、反乱に繋がった。

主張の違いと言ってしまえば政治的で大人な言い分にも聞こえるが、掘り下げてしまえば、その実は自分たちに都合のいいモノを求める、人間の欲求が見えてくるものなのだ。

「なるほど、あれがボスの言っていた黒いドラウグか……」

そう、この基地には落とすべき敵が残っている。この反乱の、今現在での実質的な指導者であるブエル・オルファーンの駆る、黒いドラウグだ。

そして、その存在感のある黒い機体が、レムスの目の前に威圧感と共に佇んでいる。

『PMC・スレイプニル所属と思われるガンダムタイプのモビルスーツのパイロットに告げる。早急に攻撃を停止し、帰還することだ。私は、ブエル・オルファーン、新生中東政府軍大佐である』

「（オープンチャンネル……?）」

敵の黒いドラウグからだろう、オープンチャンネルでブエル・オルファーンはレムスに対してそう勧告してきた。

新生中東政府軍というのは、彼らがそう自分たちの事を呼んでいるだけで、現政府からすれば反乱軍、テロリストというものにカテゴライズされる。

「テロリスト風情が軍人気取りとは……いやはや、笑い話にもならないな」

『ふん、金でしか動かん、不義の塊のような屑の集まりに言われる筋合いはない』

レムスの嫌味全開の返答に、撤退勧告の無駄を悟ったブエルは、同じようにレムス達PMCという組織自体を詰ってくる。

「戦争の、戦場の優勢・劣勢も見極められないような無能が次期政権を担ったとしても、未来は見えてると言いたいね」

『優劣？ 何を言っている……この基地を破壊しただけで勝負が決したと思っているのか？ それこそ笑い話にもならんわ……。新生政府軍に私が居る限りは、何があっても革命の火は潰えることはないのだ！！！！』

それが引き金だった。

両者は示し合わせたかのように機体を躍らせはじめた。重厚感が印象的なブエルの黒いドラウグは、全身に備え付けられたミサイルポッドから、レムスのフリスベルグに向けて弾頭を一斉発射してきた。

「年寄りによるワンマン政治があんたの目的かい？ 中東がまた紛争地になるのも時間の問題だな？」

レムスは、フリスベルグを飛翔させ、ウェブライダーに変形。次々と迫ってくるミサイルの雨を背に、空中を縦横無尽に駆け回り始める。

『同志たちは、この地に安寧を！ 平和を！！ 平等を望んでいる！！ お前たちは彼らの望みを、持つべき権利を無視してまで金のために我らを攻撃するのだろうか！？』

「平和？ 平等？ 笑わせるな。世の中なんてな、幸せな奴がいれば、不幸な奴がいる。不幸な奴がいるからこそ、幸せを手に入れる奴が生まれるように、そうなってるんだよ。問題は、自分で生んだ不幸に責任を持てるかだと俺は思うね」

交戦しながら、オープンチャンネルで怒鳴ってくるブエルに対し、非情且つ冷徹な答えを返していくレムス。

事実、彼の生きてきた世界はそうだった。誰かの不幸が、誰かの幸せに繋がる。不幸が無ければ、幸せは生れない。

レムスがこれまで生きてきた世界はそういう風に出来ていた。そして、彼の見ている世界の真実とはまさにそれそのものだ。

レムスは、フリスベルグのスタスターを吹き上げさせ、トップスピードに入りながら地上に急降下し始める。

『口だけのチッパーが！！！！ 貧富の差や格差を無視し、強い者だけが生き残る世界など、あっていいわけがない！！！！』

「お前バカか？ そのお高い理想のために、あんたらは何の罪もない一般市民を巻き込んだテロ行為を何度敢行したんだ？ 正義の元、

大義の為……そんな綺麗事のオブラートの中に、自分たちの生み出した他人の不幸、弱者を包み込んで平和を謳う。……吐き気がするな」

そして、フリスベルグは地上の一步手前で再び急上昇。

後ろの続いていたミサイルの雨は、反応しきる事が出来ずに地面に激突。大規模な爆発を引き起こした。

『抜かせ!!! 貴様らだって、金のために我らの同志の命を奪っている!!! 金と大義、どちらが崇高なモノなのか、分からんのか!!!?』

ブエルのドラウグもまた、レムスのフリスベルグの急上昇を呼んでいたのか、軌道を合わせながらビームサーベルを引き抜き、フリスベルグに切り掛かってくる。

『我々の行動は、正しいのだ!! 我らが、寝ぼけたこの中東の民を叩き起こし、崇高な大義を理解させる。それが我らの役目!! 多少の犠牲などもとより覚悟の上だ!!』

「だから…その上から目線が気に入らねえんだよ……。自分達が生んだ不幸を無視して何が革命だ、大義だよ……」

バチイイイ!!!

レムスは、ウェブライダーの状態から素早くMA状態に変形し、ビームサーベルを抜き放ちドラウグのサーベルを受け止める。

強烈なエネルギー同士がぶつかり合い、余った余剰エネルギーが大気に稲光のように光を散らす。

「現実を、目の前の惨状を見てみるよ……。志が高くても、力が伴っていないならばただの妄言、駄々っ子のおねだりにしかない。正義を語るだけの力があんたらには決定的に欠けてるんだよ」

『ぬう……。!!?』

フリスベルグのパワーゲインがグングン上昇していく。これが、ザルヴァートルドライブの真骨頂であり、一番のおいしいところでもある。

従来のアルタドライブの五倍以上のパワーを絞り出す事が出来る動力機関。まさに、『救世主』を語るに相応しいドライブである。

フリスベルグのビームサーベルは太さを増し、急激な上昇を見せるスラストーの出力によって、ブエルのドラウグは地面に向かって押し返されていく。

「いくら綺麗事を並べても、聞こえの良い大義を掲げてても、力の無いあんたらは何も成し遂げる事なんぞ出来ん。その答えこそが、今あるこの戦場さ」

『がぁ!!?』

そして、フリスベルグがサーベルを振り切り、ドラウグを地面に叩き付ける。

そこで、コクピット内のブエルは地上の様子を目にする。木端微塵になってスクラップになっていく基地の銃火器や、ドラウグ。

次々と登校の意を表していく、同志『だった』人間たち。力の伴わない正義の力など、所詮はこの程度でしかない。

レムスは、その事を、世界の仕組みをよく熟知していた。彼は、悲

しいくらいに現実しか見ていないからだ。

『何故だ……なぜ、彼らは私を置いて……投降など……？ 我らの掲げた大義に賛同し、世界を変革させると誓った同志たちが……』

しかし、大義を信じすぎていた、自分の中の物差しで世界を図り、世界をスモークのかかった窓越しから見ていたブエルには、逃げ出したかつての仲間の気持ちが分からなかった。何故、自分たちが負けているのか理解できなかった。

「あんた……飢えたことが無いんだろ……？ 食事ができることの有難さを知らないな？」

『な、何を……？』

名家の軍人家系のブエルには分からないだろう。『飢え』の辛さというものが。食糧にありつけたときの感動というものは……

「大義や正義があってもな……飯なんて食べねえんだよ。結局は、世の中金が無いと何もできない。投降してきたあいつらは、飢えの苦しみをよく理解しているんだろうさ。人が生きてくためにはな、大義なんぞよりも今日の飯を食うための金が何よりも不可欠ってことだ」

結局のところ、人が最も嫌うモノ、それは死、加えてその要素になり得る飢餓だ。

飢えは人間の欲求である食欲を抑制し、精神的にも肉体的にも痩せ細っていく。最後は、栄養失調、または免疫力が落ちることによっての感染症などで命を落としていく。

投降していく中東の一般市民層だった反乱軍だった人々は、それをまじかで見えてきたのだろう。

だから彼らは知っている。飢えの恐怖を、金の万能さを。

『金など……そんな低俗なモノに踊らされるなど………』

「低俗ねえ……。でも、今からお前は、その低俗なモノのために戦って、その金で飯食ってるやつに負けるんだぜ？　そろそろ………スクラップの時間というじゃないか」

レムスは、ビームサーベルを構えて、frisベルグを突進させる。地面に叩き付けられて、体勢が整っていないブエルのドラウグの隙を逃すほどレムスは心優しくはない。

持ち前の機動力を以て、ビームサーベルを構えながらドラウグにfrisベルグが肉薄していく。

『ふ、ふざけるなああああああああ！！！！！！！！！』

しかし、ブエルも足掻く。整っていない体勢のまま、ビームサーベルを引き抜いて切り掛かろうとしてきたのだ。

「正義や大義がなくちゃ、何もできないオッサンの攻撃なんて読めるんだよ！」

が、ブエルの攻撃をレムスは、猛進していたfrisベルグを空中でターンさせ、回し蹴りを放った。

その回し蹴りは、ビームが出る寸前のサーベルを持ったドラウグの手にクリーンヒットし、サーベルを弾き飛ばした。

『な、なにい!!? は、反応速度が……!!?』

「年寄りロートルは茶でも啜ってろ!!!」

バシユウ!!!

回し蹴りによって生まれた遠心力を殺すことなく、フリスベルグは既に手にしていたビームサーベルを斜め一閃に振るった。その攻撃は、黒いドラウグを斜め一直線に叩き切っており、そこから火花が散っている状態である。

そして……

『認めん……認めんぞおおおおお!!!!!!!!』

ドオオオオオオン!!!!!!

破損個所がアルタドライブにまで進行していたのだろう。中東反乱軍の希望だった黒いドラウグは、ブエルの叫びと共に爆散した。

「リンドブルム、こちらフリスベルグ・レムスだ。黒いドラウグの解体作業完了。その他敵勢力も完全沈黙を確認。任務完了、これより帰投する。」

『よし、お疲れさん。ジグやベルはもうこっちに帰って来てる。後はお前だけだ、さっさと帰って来い』

「ヤー」

レムスは、任務の完了を告げると、通信先のヴァーリに言われた通

り、フリスベルグを飛翔させ、ウェブライダー形態に移行。猛スピードで砂漠の空を飛ぶ。

黒いドラウグの破片や、死んだであろうブエルには目もくれない。そんな行為に、何の意味もないことをレムスは知っているからだ。

「さてと……お次はお姫様の里帰り任務だな……。まったく、多忙だよ………」

レムスの頭にあったのは、次の仕事である、アリシアの依頼を完遂することだけだった。

Act. 7 大義ある戦いと、大義なき戦い（後書き）

フィーナ「作者？私の出番がないじゃない」

F20C「わ、忘れてたことってこれだったのか！！ あ、いや…
…今回はその…ね？ 戦闘メインなんで…その…」

フィーナ「……………無能ね…………」

F20C「orz」

レムス「おいおい……………」

F20C「今回の哲学思想は結構びったりだと思わない？ていうか、
これを基に戦闘シーンを作ってみたんだけどさ」

レムス「大義があっても、力が無けりゃ無力。力があっても、反乱
軍のやって来たテロには上辺だけの正義しかなかった。だから横暴
ってことか？」

F20C「極論ではあるけどね。何が正しいかなんて、所詮は相対
的な問題だから、一概にどうこうってことは言えないだろうね。今
回のはほんの一例だと思っていただければ」

レムス「ややこしいもんだな世の中ってのは」

次回
A
c
t.
8
『グリトリムへの道』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3334q/>

機動戦士ガンダム U.C.0503

2011年10月6日16時33分発行